



ケンペルが持ち帰った『万国総界図』 -『万国総界図』がヨーロッパ学界に与えた影響-

古賀慎也

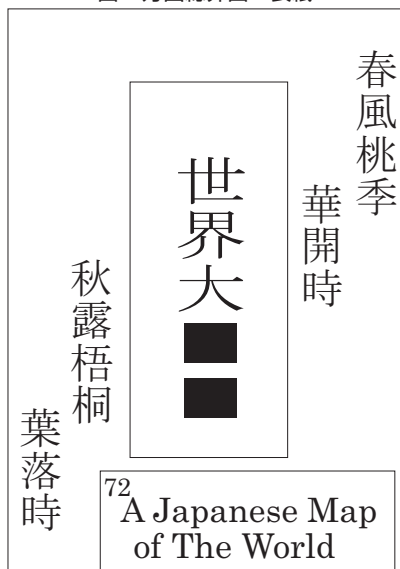
The Map of the whole world “BankokuSoukaizu”, which was made in Japan and later brought to Europe by Engelbert Kaempfer, and its impact in Europe
Shinya KOGA

九州大学比較社会文化学府：〒 810-8560 福岡市中央区六本松 4 丁目 2-1
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University : 4-2-1, Ropponmatsu, Chuo-ku, Fukuoka City, Fukuoka, 810-8560 JAPAN

1. はじめに

ドイツ人医師エンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kaempfer は1690(元禄3)年～1692(元禄5)年の間日本に滞在し、その間、日本に関する観察及び資料の収集を行った。英語版『日本誌』の訳者ショイヒツァーが作成したケンペル旧蔵の日本資料のリスト(ショイヒツァーリスト)の中には「日本人による世界全図」が見られる。近年、ケンペル手稿の調査を行ったウォルフガング・ミヒェル氏によって、この地図が貞享5(1688)年に初版出来の石川流宣『万国総界図』であることが実証された¹。この地図はヨーロッパにおいて「ケンペルが持ち帰った地図」として18世紀の半ばから19世紀のはじめにかけて紹介されている。ケンペルの死後、手稿類を含むコレクション類(以下ケンペルコレクションとする)はハンス・スローン Hans Sloane 卿によって2度にわたって購入された。ケンペルの遺稿の一部はハンス・スローン卿のもと、ヨハン・カスパー・ショイヒツァー Johann Caspar Scheuchzer により英訳され、1727年に『日本誌』²として出版されることとなった。スローン卿の死後、そのコレクションは大英博物館設立の基盤となり、ケンペルコレクションも大英博物館に収蔵された。ケンペル旧蔵の『万国総界図』については19世紀のはじめまでは大英博物館に所蔵されていることが確認できるが³、1959年のケネス・ガードナー氏⁴、そして1980年代からユーン・ブラウン氏らによって行われたケンペルコレクションの調査(この調査では旧東洋写本・版本部所蔵の資料から書籍32部54冊、地図10種類の合計42点と、多くのケンペル旧蔵本が発見・公表された)では発見することができなかった⁵。これは、同氏らの調査が大英博物館旧東洋写本・版本部のものに限られているためである。その後、宮崎克則氏(九州大学総合研究博物館)により、旧東洋写本・版本部と別部局である大英図書館マッフルームに貞享五年『万国総界図』(Map Collections ; Maps 920.(121.))⁶が所蔵されて

図1 万国総界図 表紙



縦19.7×横13.0cmに折りたたまれている。
右下に貼紙があり、英字で注記されている。
以下図版の出典・所蔵などについては論文末尾の表7に一括して示した。

いることが確認された(図24参照)。江戸中期の地図にしてはかなり保存状態が良好で、手彩色の美しい地図である。この地図は折図になっており、表紙中央部には題箋が貼り付けられている(図1)。下部には貼紙と英字による書き込みがあり、宮崎氏によると張り紙はケンペルコレクションに類似しているという。ただ、これだけではこの地図がケンペルの旧蔵のものだと断定することはできない。宮崎氏が発見した『万国総界図』にはケンペルコレクションの「トレードマーク」であるケンペル自筆の極細字による書き込み⁷が見られないからである。

そこで、本稿においては宮崎氏によって発見された大英図書館マップライブラリー蔵の『万国総界図』とケンペルが持ち帰った『万国総界図』との関係を諸文献によって明らかにし、ついで、18・19世紀ヨーロッパにおいて『万国総界図』がどのように利用されたかについて考察する。

2. ケンペルと日本製世界図

[1]ケンペルの北太平洋地域への関心

ケンペルはしばしば、ヨーロッパにおいて「有名な旅行家」と称される。彼は1683年ストックホルムを出発してからモスクワ、ペルシャ、バダヴィア、シヤムなどを経て1690(元禄3)年長崎に到達している。ケンペルが生前に上梓した『廻国奇観』(1712年)はペルシャにおける見聞記を中心に、また『日本誌』(1727年)はシヤム及び日本での記述を中心に構成されている。同書はその後1世紀以上にわたりヨーロッパにおける日本研究の基礎資料として活用されたといわれている⁸。1728年には早くも英語版の再版が、1729年には英語版から仏語版⁹と蘭語版が重訳され、1733年には蘭語本再版¹⁰が出版された。また、1749年にはデュアルド Du Halde の『中国帝国誌』独語版¹¹の中に抄訳ではあるが、仏語版から独訳されたものが収録された。1776～1778年にはレムゴーに残されていたケンペルの原稿をもとに、クリスチャン・ウィルヘルム・ドーム Christian Wilhelm Dohm によって彼の識語を加えた独語版、通称「ドーム版」が版行されている¹²。

この『日本誌』の記述の中には、ケンペルがモスクワとアストラカンにおいて、「ロシア皇帝から流罪を申し付けられ、シベリアとカタヤ Kataya から中国まで旅した人々」から聞いた話がみられ、彼らの話によるとアジアの北東端からアメリカ大陸北西端は地峡でつながっているとされている¹³。また、蝦夷地¹⁴に関する情報として以下の文章を載せる。

この島(筆者注:蝦夷地)の後方、北の方に日本人に奥エゾ Okujeso と呼ばれる、上あるいは高エゾが続いている。そのような国が存在することは、全く疑問を差し挟む余地はないが、それ(筆者注:蝦夷地)が韃靼あるいはアメリカにつながっているのかどうか、あるいはアニアン海峡 *streight of Anian*¹⁵ をどこに配置すべきか、あるいは大変長きにわたって望まれてきた北海から大インド海 *great Indian Ocean* にぬける航路はそのようなものなのか、また中間に海峡や航路を持たず、タートルまたはアメリカのどちらかに近接されているのかどうかということに関して地理学者たちは未だ結論を出しかねているようだ¹⁶。(1巻4章)

ケンペルは、「奥エゾ」すなわち蝦夷地の北方にある陸地がアジア大陸とつながっているかどうか、またそれはアメリカ大陸とつながっているのか、あるいはアジア大陸の北東部がアメリカ大陸北西部とつながっているかいないかということについて確かな情報を得る必要があると痛感していた。そして、ケンペルは「モスクワとペルシャでの旅行の間、また日本にいた間にこれら北の国々の正確な状態を求めようとしたけれども、概して不適切で、公に紹介するに値するものに出会うことはなかった」と述べている。

ケンペルがアジア北東部および北アメリカ大陸北西部に関する情報に興味を示していたということは、シベリア近辺の地図を詳細な説明を添えて書き写していることから明らかである¹⁷。ケンペルが簡潔に述べている「地理学者たち」の疑

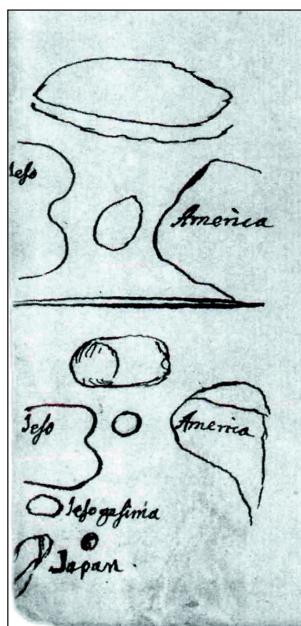
間は、当時のヨーロッパにおける共通の関心事であった。ケンペル来日の50年ほど前、17世紀はじめには、オランダ東インド会社総督ファン・ディーメン *Anthonio van Diemen* の命令によって、フリースによる北方探索がなされていた¹⁸。その結果、蝦夷地東岸部の測量が行われ、カンパニーランド(ウルップ島)、ステートランド(エトロフ島)が発見された。しかしこの航海では蝦夷地西岸部に関する確たる情報は得られず、またカムチャツカ半島における経度の誤りなどからアジア北東部に関する正しい地理的情報は得られていなかったのである。ケンペルによると日本人も奥エゾ、つまりアジア北東部に関する明確な情報を持っていないという。しかし、日本において聞き及んだ情報はその真偽のほどが確認できなくても積極的に書き記している。ケンペルが日本で得た情報は以下の通りである¹⁹。

- (1) 奥エゾに漂着した日本人の船乗りが、「毛むくじらの住民」(アイヌを指す)の中に中国の服を着た者が何人か混じっているのを見たという報告(なお1684年にもジャンク船によって同様の報告がなされていると記している)。
- (2) 日本人船乗りによる、エゾガシマの奥地では北風しか吹いていないから、韃靼を通過して北氷洋に出られるに違いないという談話。
- (3) 数年前、日本の幕府船が日本の東岸から送り出され40度と50度の間で難航し、東の方で陸地に出会ったという報告。

(1)は奥エゾとアジア北東部が地続きになっているかどうかという疑問に対して、この報告からは、「この国(奥エゾ)と韃靼との間には何らかの連繋がある。少なくとも距離的に見てそう離れていない」という情報を、また(2)からはアジア北東部と北アメリカ大陸北西部の間の海峡に関する情報を導き出している。(3)の記事について、具体的にどの調査を指しているかは不明であるが、貞享年間に水戸藩によって蝦夷地調査のために快風丸が派遣されており、同船は貞享4(1687)年、石狩に到達している²⁰。あるいは延宝年間の嶋谷市左衛門らによる小笠原諸島の探検のことについて述べているのかもしれない²¹。ともかく、ケンペルはこの陸地が本州の東方にあると推測し、発見されたのは「アメリカと思われる」としている。

[2] 『日本誌』中の日本製世界図に関する記述

図2 ケンペル手稿北太平洋図

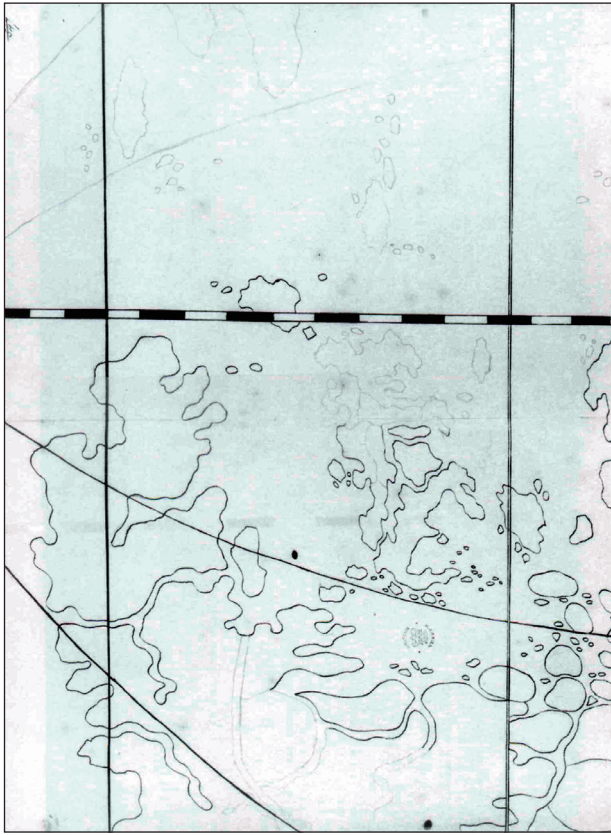


『日本誌』の中にはしばしば日本で見た地図に関する解説が出てくる。図版として載せられている地図は第8図の「68州に分けられた日本地図」、第19図の「長崎の町とその周辺地区の地図」、第27図の「京都の街の見取地図」、第30図の「江戸の街の見取地図」、それから江戸参府までの道中地図などである。図版はないが、日本で見た世界図に関する情報は本文中にも見られる。先ほどの(3)で紹介した記事の次には以下のように記されている。

私は、それらのいくつかを江戸において長崎奉行対馬守(筆者注:山岡対馬守景助)の公邸で見たほか、大坂近辺の住吉社 *Temple of Symmois* その他いろいろな寺社で見たけれども、これらの海域の地図を調べてもあまり得るところはなかった。これらは全て大きなタートルから突き出た巨大な大陸を表現しており、エゾガシマの後方まで伸び、日本の沿岸よりはるか東の、経度15度の所まで到達している。そこと、隣合うアメリカの間には大きな空間があいている²²。(1巻4章)

この地図には「カベルサリ *Kabersari*、オランカイ *Orankai*、シツイ *Sitsij*、ヘロサン *Ferosan*、アマリシ *Amarisi*²³」などの地名表記が「カナ *Canna*あるいは共通の書

図3 ケンペル手稿『万国総界図』(写)



体」で記されているとケンペルは説明している。これは正保期前後に成立した木版世界図『万国総図』のアジア北東部にあらわれるカルヘサン、おらんかい、シツチ、ヘルシアン、アマシリの地名を指している。「最後の2つの州」すなわち **Ferosan**、**Amarisi** の間に大きな河がありエゾ島の方に注いでいるというケンペルの説明は『万国総図』の図像と一致しており、ケンペルが江戸や大坂で見た日本製の世界図というのはこの系統の地図と考えてよいだろう²⁴。ケンペルは、この世界図が「距離の縮尺や緯度経度もない」、「稚拙な」地図で、さらに「公式な記録に用いられる真字 **Sisi**」で書かれていないので、その信憑性については譲歩せねばならないと考えている²⁵。江戸においては長崎奉行から2枚の地図を見せてもらっており、そのうちの1枚は国名・地名の記入が無く、おそらくヨーロッパ地図の模倣であろうと述べている。もう1枚の地図は、「日本人自身が作成した世界全体の地図」で、図法は卵形、地名は「かたかな **KattaCanna**」で描かれていたという。この地図によってケンペルは「日本の北にあるこれらの国々」の状態を観察する機会を得たと述べている。この地図は以下のように描かれているという。

日本の後方、奥州 **Osju** の2つの大きな北の岬の向かい側には、エゾガシマ **Island Jesogasima** があり、そしてその島の後方には中国の2倍ほどもある国がある。これはいくつかの州に分けられており、その大きさの約3分の1が北極圏の後方から北極の方向に達しており、日本の沿岸部よりもはるかずっと東方にのびている。このアメリカとは向かい側の東岸部には大きな湾があり、それは正方形にかなり近い形をしている。この国とアメリカの間には1つの航路があり、そこには小さな島がある。そしてその後方、さらに北方には他の長い島がありほぼ2つの大陸の末端部すなわちエゾの西側とアメリカの東側に届きそうである。そしてこの表し方はまるで北方への航路に蓋しているようである。同様にして北極周辺の未知の国々は島として表現されている²⁶。(5巻14章)

このような説明を補足するような地図は『日本誌』のいずれの版にも見られないが、ケンペル手稿の中には手書の世界図が2点含まれている。ひとつはアジアとアメリカを含む北太平洋地域のスケッチ²⁷ (図2参照)である。紙面は縦長で、中央線によって上図、下図に分けられている。下図には下から順に **Japan**、**Jesogasima** が記され、その左上に **Jeso**、そして右隣の半島に **America** が示されている。上図には向かい合うように **Jeso** と **America** が示され、その北方と間に島が描かれている。上述の引用史料のアメリカとアジアの間に「蓋した」ように描かれていたという島に関する補足説明としての地図であると思われる。もうひとつは『万国総界図』の模写²⁸ である (図3参照)。ケンペルが帰国後に鉛筆書きで模写し、その上からペンでなぞったものと考えられるが、なぜかその作業は途中で終わっている。あるいは、ケンペルはこの世界図を『日本誌』附図として収録しようとしたのかもしれないが、この図は採用されることはなかった。透かしがみられることから料紙はヨーロッパ製の古紙で、料紙からケンペルがヨーロッパにおいて本図を模写していると判断される²⁹。またショイヒツァーが付け加えた『日本誌』附図の第21図「遊覧船」の図像には、『万国総界図』紙面左上、右上に記載の「大清船」「日本船」の図像がそっくりそのまま利用されていることから(後述)、ケンペルがこの『万国総界図』をヨーロッパに持ち帰ったことは間違いない。

3. 江戸期の世界図と石川流宣『万国総界図』

[1]『万国総界図』の特徴

大英図書館所蔵の『万国総界図』³⁰の書誌情報と内容は以下のようになっている。本図は横57.5cm×縦128.0cmで、木版筆彩。東が上になっており、紙面は縦長になっている³¹。卵形図法で描かれており、また南方の巨大大陸「メガラニカ」を有していることから一見してマテオ・リッチの『坤輿万国全図』（1602年刊）³²の影響を受けていることがわかる。貞享5（1688）年の版行。画工石川俊之（流宣）の識語として、「萬國総海之圖、昔日より版行数多有り」と雖も、其形分明ならず。茲に因り、今亦諸圖方量を改めて、海上通乗畫に加え、開版せしむる者也」（読み下し）と記す。これによると、この系統の世界図は以前からあったが、国や海の形が明確ではなかったので手直して版行したという。ここで述べられている以前から版行されていた世界図とは、正保期（1644年～）前後から作成された『万国総図』系統の世界図を指しており（なお、ケンペルが住吉で見たという世界図もこの系統の地図である）、特に絵屋庄兵衛刊のものが直接の粉本とされている³³。具体的に改変してある箇所を指摘しておく、境界線や河川を強調して描くことによって「形」を「分明」にしてある点、紙面上部に和船様の「大清船」「日本船」、紙面下部に「日本肥前国ヨリ諸国島遠近在渡海分之通乗」を加えている点などである。また、「万国総図」諸本に比べて日本をより紙面の中心部に近づけているため、元々日本の東方海上に配置されていた「金島」「銀島」が本州の北方に位置し、またアジアの北東端が蝦夷地の真上にくるようになっている³⁴。さらに、同じ石川流宣の作である『本朝図鑑綱目』（貞享4（1687）年刊）を元に日本周辺にアレンジを加えている。

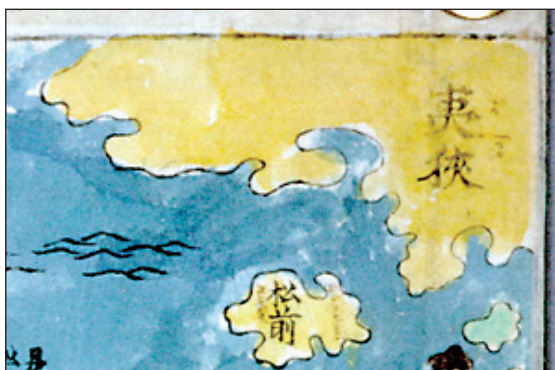
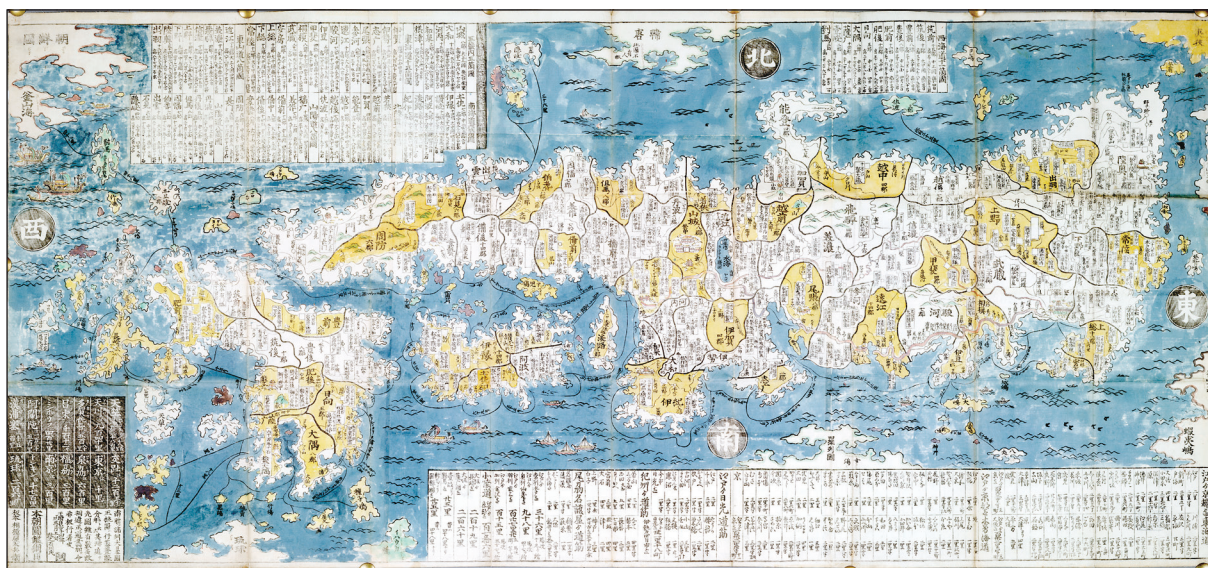
また、『万国総界図』に示された国名や地域名数は、『万国総図』系統のそれよりも明らかに増えており、特に東南アジア、中国、北東アジア地域などの地名は相当数増補されている。『万国総図』で「大明国」と記されていた中国は、「大清国」に改められ、北アジア地域には、『万国総図』では仮名で表記されていた「韃靼」「阿蘭界」とその属州が記されている。

[2]「夷狄」と「蝦夷島」

興味深いのは、『万国総図』系の諸本では「エゾ」「ゑそ」などとされている地域に「夷狄」を配置し、本州島の東方海上に「蝦夷島」を配置している点である。このような配置は『万国総界図』以前にも以後にも例がない。これは同じく流宣の手になる日本図『本朝図鑑綱目』において紙面右上部、本州の北方に示された「夷狄」と紙面右下部、本州の東方に示された「蝦夷島」の配置を踏襲したものであろう（図4参照）。『本朝図鑑綱目』の「蝦夷島」の中には「メナシフロ」という地名が配置されている。これはアイヌ語の「メナシクル」（メナシは東の意味）で、根室地方をあらわしているという³⁵。『本朝図鑑綱目』作成の際に参考にしたと考えられる『新改日本国大絵図』³⁶（内題：扶桑国之図。寛文2（1662）年刊行）には紙面の右端、本州の東方に「ゑぞのちしま」が配置され、この島の中に「めなしふろ」と記入してある。したがって流宣はこの「ゑぞのちしま」を「ゑぞがしま」＝「蝦夷島」へと読み替えたものと考えられる。その代わりに紙面右上部に「夷狄」を配置している。

このような「蝦夷島」の配置は流宣の遊び心なのか、はたまた日本の東方に「蝦夷島」があると本当に信じていたのかということについては、にわかには判断できないが、ともあれ『万国総界図』における記載はその後ヨーロッパにおいて問題とされるようになる。

図4 『本朝図鑑綱目』



上は全体図で下は部分図。左から順に「蝦夷島」「メナシフロ」「松前」「夷狄」がある。本図はケンペルコレクションのもので、地名にはローマ字で振り仮名が附されている。

4. 『万国総界図』の行方

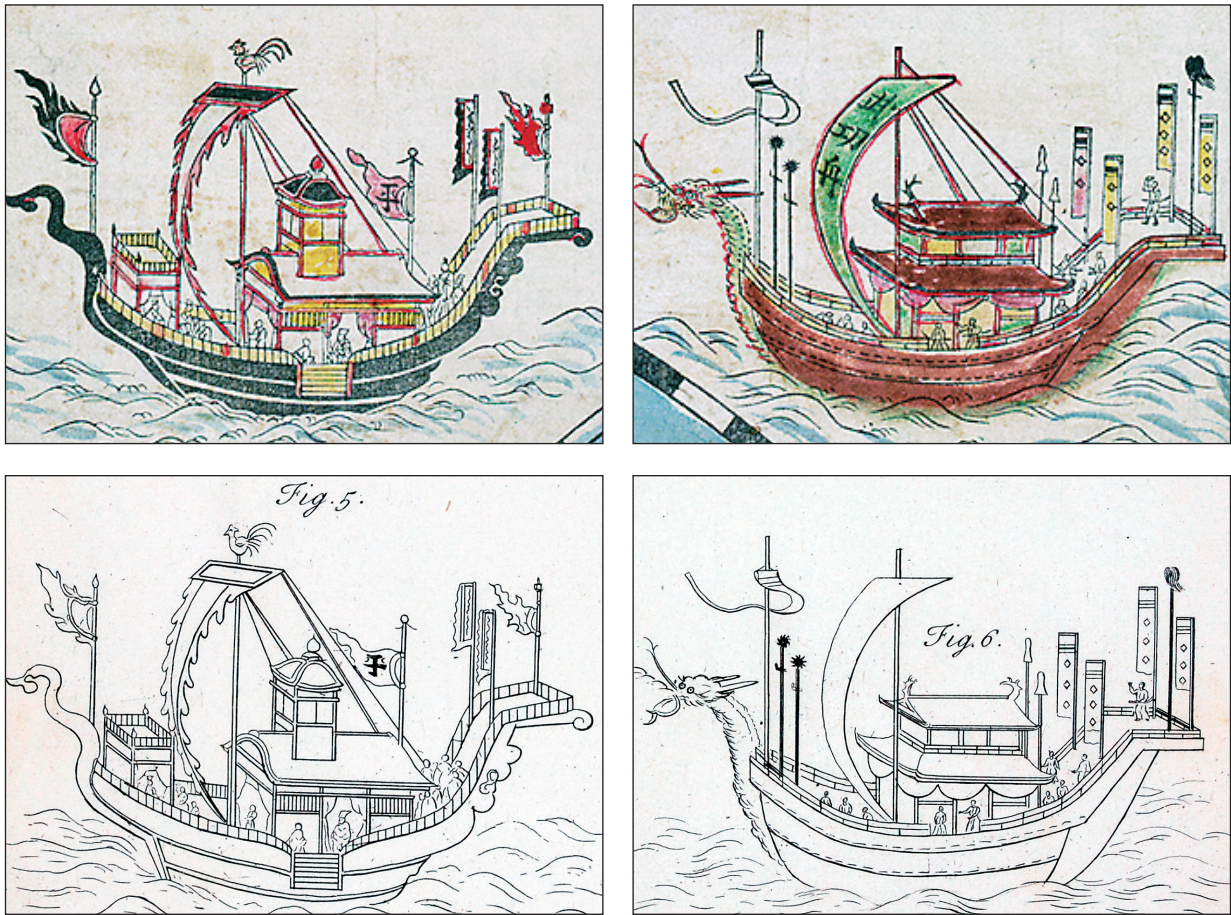
[1] スローンコレクションへ

『万国総界図』がケンペルの手によってヨーロッパに持ち込まれてから、どのような扱いを受けていたのであろうか。表5に関連年表を挙げたので、適宜確認されたい。

ケンペルは1716年に没するが、日本から持ち帰った書籍類と彼自身の手稿類はハンス・スローン卿の手に渡ることとなった。ハンス・スローン卿は収集家として名高く、かれのコレクションをもとに大英博物館が設立されたことは周知の事実である。1727年初版の『日本誌』には訳者ショイヒツァーの序が附されている³⁷。これにはショイヒツァーが調査したケンペル旧蔵の日本資料目録が含まれている。表6はショイヒツァーリストにみられる地誌・地図関係の書籍と現存書目を挙げたものである。この中に、

*A map of the whole world, according to the Japanese. It is two Feet broad, and four Feet three Inches long.

図5「大清船」(左上)「日本船」(右上)と「遊覧船」(左下・右下)



ほぼ正確に模写されているが、日本船の旗に書かれた「武功舟」の文字および旗を支える紐は、遊覧船の図(Fig. 6.)には反映されていない。

という記載が見られる。「日本人による世界全体の図」で、その法量は幅2フィート×長さ(縦)4フィート3インチとしている。1フィート=0.3048メートルで換算すると、幅約60.96cm×縦約129.54cmとなる。『万国総界図』の法量(横57.5cm×縦128.0cm)と比べて若干の差はあるが、紙面の計り方やあるいは地図の皺によって出てくる誤差の範囲内であろう³⁸。目録には*が附されているものがあり、これはショイヒツァーがスローンコレクションの中にその所蔵を確認したものである。『万国総界図』の紙面左上と右上に掲げられた「大清船」「日本船」は『日本誌』の第21図のFig. 5. 6. Two pleasure-boats, with the sails, flags, banners, &c.すなわち「帆、将旗、軍旗などをもった2つの遊覧船」³⁹に利用されている(図5参照)。『日本誌』に「遊覧船—これは1つの分類で、川の上下もしくは小さな湾を横断する際に使用される—もまた、所有者の好みによってその構造は変化する。一般的にこれらは漕ぎ船として使用される。(中略)屋根と、船の幾つかの部分には奇妙に感じられるくらい様々な旗やその他の飾りがつけられている。これらの船の図は最も正確な説明から期待されるよりもより十分な理解を読者に与えてくれるだろう。(図21、挿絵5と6を見よ)」⁴⁰という記述および指示があり、この記述に見合う図像としてショイヒツァーが「大清船」「日本船」を選んだのであろう。しかし『万国総界図』の世界図本体の方は、それに関する記述が『日本誌』本文中に見られたにも関わらず、附図として利用されることは無く、その存在も一般には知られないままであった。

1747年になると、王立協会の雑誌『学士院紀要』⁴¹の中でこのスローン卿所蔵の日本製世界図についての紹介がなされた。王立協会会員でもあるアーサー・ドップズからウェールズ王子チャールズ・ステイン殿下に宛てた手紙の文面中においてである。当時の手紙“Letter”は、いわゆる私信的な役割のみならず、公的に公開されることも想定した学術情報

交換の手段としても利用された⁴²。ドップズの手紙はその後“Extract”すなわち抄出として1749年に当時イギリスで最も発行部数の多い雑誌であったといわれている『ジェントルマンズマガジン』⁴³においても紹介され、より多くの人々に知られることとなった。この中で、ケンペルが日本で購入した地図は「ハンス・スローン卿の博物館」に納められていると報じられた。

[2]『万国総界図』写しの作成と発表

その後、1752年にはロイヤルアカデミーの研究会において『万国総界図』の全体図がはじめて紹介されることとなる。以下はこの時の発表者、フランスの地理学者フィリップ・ブアシェ Philippe Buache の著書『俗に南海と言われる大海の北部の新発見に関する地理学のおよび物理学的考察』⁴⁴ (1753)に収められた一節である。

私は5月2日の科学アカデミーの公衆会議で日本人の図の全体を公表しました。そして、私の説明がついたこの興味深い部分をほしがっている人たちに、私はそれに関する縮図を与えることができます。この日本人の世界図は、ケンペルによってヨーロッパに持ち込まれ、故ハンス・スローン氏の陳列室に収められており、スローン氏の死の少し前に、私にそれを伝えてくれたドギーニュ氏に、ロンドンにあるそのコピーが送られた。それは卵形で、そして日本が中心にある⁴⁵。

ブアシェが述べるように、論文に収録されたのは全体図でなく、部分図である。図25は同書に収められた一葉であるが、ここには北半球の内、東南アジア北部、中国、タタール、日本、そして北アメリカ大陸などが描かれている。『万国総界図』にない「奥エゾ Oku-Jeso」「カムチャツカ」を点線で表示している。また地図投影法を北極点中心にしたいわゆる「ドリール図法」⁴⁶に変えており、緯度や経度も示されている。日本に関してはなぜか原図に見られる「四国」と「淡路」が省略され、さらに九州南部が途中で切れている。ハンス・スローン卿からドギーニュにそしてドギーニュからブアシェに贈られた写図を元に論文に収録したというから、おそらくスローン卿のもとで写図が作成された時に省略されたものと考えられる。「ドギーニュ氏」というのはフランスの東洋学者であるジョゼフ・ドギーニュ Joseph de Guignes のことである。ドギーニュもこの科学アカデミーでの報告をもとにした論文「中国人によるアメリカ海岸の航海に関する研究」⁴⁷においてブアシェと全く同一の図を記載し、また図の来歴について述べている。

ケンペルは日本でその国の人々が作った地図を見たことで知られている。その地図は日本より西に延びているカムチャツカをあらわしていた。そのアメリカに対する、東の沿岸は正方形の形に延びており、その真ん中には一つの小さな島がある。そしてより北には、両方の大陸の端に触れる、二分の一ほどの島が見られる。この有名な旅行者がヨーロッパにもたらし、そして故ハンス・スローン氏の陳列室に納められた地図にはカムチャツカの東海岸の海峡の向こう側に大きな国、アメリカを見ることができる。この海峡の北端部には、両方の大陸の方にのびた島がある。ハンス・スローン氏はこの抜粋を私に伝えることに同意し、そして王立協会の秘書であるバーチ氏が私にその抄出の写しを贈ってくれた⁴⁸。

ドギーニュの論文は元となる口頭発表から9年後の1761年に出版され、先のブアシェの著書に附された地図の上下2図を2枚に分けて載せている。地図に関してはブアシェのものと特に異同は見られない。この論文には生前、ハンス・スローンが『万国総界図』の写しをドギーニュに贈ることを約束し、そして王立協会秘書のトマス・バーチ Thomas Birch⁴⁹ が写しを送ったと記されている。ブアシェの著書やドギーニュの論文に載せられた図はトマス・ジェフリズ Thomas Jefferys (1761年)やドブシェ Dezauche の地図⁵⁰ (1788年)にも利用されている。さらにデイドロとダランベルが編纂した『百科全書』図版編(全11巻、補遺1巻、1762~72, 77年)にもベーリング探検隊の「新発見に基づく地図」と共に所載されており、

この地図が18世紀を通じて影響を持ったようである。

[3] クラブプロート図と大英図書館蔵『万国総界図』

その後、ドイツ人東洋学者ユリウス・ハインリッヒ・クラブプロート Julius Heinrich Klaproth によって全体図が紹介されることになる。図27はクラブプロートによる論文集『アジアに関する紀要 Mémoires relatifs a l'Asie』に収録された論文「ロンドンの大英博物館に保存されている日本製の世界図に関する略述」⁵¹ の附図である。ブアシェによる部分図同様、四国と淡路が省略され、さらに九州南部は途中で省略されている。タートル(韃靼)東岸地帯の実線部も途中で消えている。これはブアシェが紹介した図と一致している。クラブプロートはこの地図の原図と来歴について、「この世界図の原本は有名な旅行者、エンゲルベルト・ケンペルによってヨーロッパにもたらされた。そして、他の原稿とともに、ハンス・スローンによって購入され、後に大英博物館に寄託された⁵²。」という。そして論文に用いた図は写しであると述べている。また『アジア雑誌』所載の『アジアに関する紀要』の書評にはクラブプロートが、バーチ Birch 氏によって約70年前にフランスにもたらされた地図を元に本論文を記述したとある(図26および解説文を参照)。先にブアシェの報告で、ハンス・スローンからドギーニュへ、ドギーニュからブアシェに『万国総界図』の写しが贈られたことを確認した。この書評が1828年に発表されたものであるから、そこから約70年前と考えると、1750年代頃であり、ブアシェあるいはドギーニュ論文の記述年代と重なる。また、ブアシェ、ドギーニュの図とクラブプロートの図はタートル、四国、淡路、九州南部の表記に関して一致するので、クラブプロートが手に入れた写しというのはドギーニュあるいはブアシェ旧蔵のものと考えてよいであろう。

クラブプロートの記述によってこの写しの書誌情報を確認すると、寸法は「縦3フィート1/2インチと横1フィート9インチの幅」で、メートル法に換算すると縦92.71cm×横53.34cmとなる。原図と比べて、特に縦が短い図となっているが、これはこの写しのタイトルと出版年の部分が省略されているためであると考えられる。また、図には彩色が施されていた。クラブプロートはロンドンを訪れたことがあったが、ケンペルコレクションを調査することはできなかったと述べている。そのため、ロンドンのアジア協会の秘書「W.フットマン氏⁵³」と連絡をとり、大英博物館所蔵の原図の情報を求めた。フットマンからの手紙は『アジア雑誌』⁵⁴ のなかで報じられている(本文ならびに全訳に関しては図26および解説文を参照)。

ここではじめて、大英博物館所蔵『万国総界図』のタイトル、出版年などが提示され、彩色については写しと原図では異なることが指摘された。フットマン報告による原図の彩色を現大英図書館所蔵『万国総界図』と比較すると、中国は黄色、朝鮮は薄い赤、タートル(韃靼)は緑、インド(小天竺)は白と一致しているが、日本は赤色で一致しない。したがってもしこの手紙に誤記あるいは翻刻の際の誤植が無ければ、1828年以前にフットマンが見た『万国総界図』と現在大英図書

図6 クラブプロート図(左)大英図書館本(中)九州大学本(右)



館に所蔵されている『万国総界図』は異なるものであるといえる。しかし、クラブロートが論文に所載した図と大英図書館所蔵『万国総界図』には奇妙な一致も見られる。すなわち、大英博物館所蔵本にしか見られない擦り切れが、写しの中に反映されている点である。図6はアフリカ大陸北東部の拡大である。保存状態のよいものでは「マナトカル」となっている地名が⁵⁵、大英博物館本では「■ナトカル」(■は擦り切れ)となっており、クラブロートの写しにおいてもこの文字の擦り切れが反映されて「Natokarou=ナトカル」とされている。図の説明においても同様に「ナトカル」とある⁵⁶。

以上、『万国総界図』がヨーロッパに持ち込まれてからの取り扱いについてまとめると、この図はケンペルからスローン卿の手に渡り、それからスローン卿の死後は大英博物館に収蔵されることとなった。この『万国総界図』は『日本誌』英訳版の訳者ショイヒツァーによって発見され、「大清船」「日本船」の図像が利用された。しかし、世界図の部分に関しては利用されることはなかった。スローン卿の死の前後には『万国総界図』の写し(世界図の部分のみ)が作成され、1752年ごろにはドギーニュそれからブアシェの手に渡っていた。そしてこの写しの部分図が1753年にブアシェの著書に附図として所載され、その後18世紀を通じて様々な著作に引用された。それから70年後、ドギーニュもしくはブアシェ旧蔵の写しがクラブロートの手に渡り、1828年、『アジアに関する紀要』の中で全体図が紹介されることとなった。この時フットマンにより大英博物館所蔵の『万国総界図』が実見され、その彩色が発表された。この彩色と現在大英図書館に所蔵されている『万国総界図』では、中国、朝鮮、タートル(韃靼)、インド(小天竺)までは一致しているが、日本に関しては一致をみない。神戸市博物館所蔵の『万国総界図』⁵⁷ と大英図書館本の彩色を比較した結果、地域の色分けには特に規則性は見当たらない。したがってフットマンの報告する5カ国の彩色の内、4色までもが一致するのは偶然とも思えない。また、大英図書館本固有の特徴である「擦り切れ」とクラブロート図の地名の一致もある。これらのことから総合的に考えて、現在大英図書館に所蔵されている『万国総界図』がケンペル船載のものである可能性が高いと筆者は考える。大方の批正を仰ぎたい。

5. 18世紀ヨーロッパにおける『万国総界図』の受容

『万国総界図』はケンペルによってヨーロッパに持ち込まれ、またショイヒツァーによってもその存在が確認されていたが、この地図の部分は『日本誌』の中では利用されることはなかった。ケンペル自身が「彼らの地図は全て稚拙」で「公式な記録に用いられる真字Sisiで書かれていない」⁵⁸ などと日本製の世界図の杜撰さに言及していたのもその理由の一つであろう。事実、『万国総界図』には緯度も経度も記されておらず、また仮名書きの地名も多く存在する。しかし、18世紀半ばになるとこの地図が突如として注目され、様々な著書において利用されるようになることは前章までに確認した。本章においてはこのようにケンペル自身によって杜撰といわれた『万国総界図』がヨーロッパにおいて何故注目され、いかに利用されたかについて検討する。

[1]アーサー・ドップズによる『万国総界図』の「発見」

18世紀半ばになると、アルスター人であるアーサー・ドップズ Arthur Dobbs によってはじめてこの日本製世界図が注目されるようになった。ドップズはアイルランド議員として活動し、イギリスの北米植民地活用論や北西航路の探索を積極的に提言した人物としても知られている。ドップズは、北西航路—ハドソン湾から太平洋にぬける航路—が実現すればイギリスはアメリカ大陸の西海岸地域はもとより、「この楽で短い航路で日本や中国にさえ」船を送れるとし、また「艦隊を送って英国との有益な通商条約の締結を日本に要求することもできる」という論を展開していた⁵⁹。ドップズは1747年『学士院紀要』にて、ベーリングの探検に関する考察を含めた手紙を寄稿した⁶⁰。ベーリング探検隊は、その第1次探検(1725～)においてそれまで未知であった北東アジア沿岸地域(現ベーリング海峡付近)に、また第2次探検(1733～)において北アメリカ大陸北西部に到達した。それはケンペルにとって、またヨーロッパの地理学者たちにとっても長年の疑問であったアジアとアメリカの間の海峡すなわちそれまで架空の海峡であった「アニアン海峡」の存在をはじめて実証する偉大なる航海でもあった。

北緯40度において17リーグを1度に割り当てると、その距離(筆者注:カリフォルニアから日本までの距離)は約1360リーグになる。同じ計算によってカリフォルニアはアジアの北東岬から少なくとも700あるいは800リーグあるにちがいない。だからカリフォルニアにつながっている新たに発見された国を想像するまでもなく、そのような広い空間にはとても大きな国あるいは島*があるかもしれないし、また50から100リーグの幅の開かれた海峡あるいは海が発見された海岸とカリフォルニアの間に(筆者注:大きな国あるいは島が)あると考える余地があるだろう。オイラー Euler 教授⁶¹の提供した報告書によると、ベーリングは日本島に向かって南向きに航海し、そこからは東向きに50ドイツマイル、約250イギリスマイル進んだ(20リーグを1度とすると、約80リーグとなる)。日本からその距離で彼(筆者注:ベーリング隊)は島を発見し、大きな河に到達するまで接岸することなく北東岬の方に向かった。

*ケンペル医師によって1686年(ママ)⁶²に日本で購入された地図に見られるように、日本で印刷された世界図の中で日本人はアイルランドと同じくらいの大きさのこの非常に広がりのある2つの島を配置し、名前を与えている。この地図は今、ハンス・スローン卿の博物館にある⁶³。

ベーリング探検隊の報告書から計算によってはじき出されたのは、アジアの北東部からアメリカ大陸カリフォルニアまでの距離が、約1360リーグ=約6528kmもあるという数値である。このような巨大な空間には大きな国あるいは島が存在し、またアジア北東部とアメリカ大陸の間に海峡があるという推測も成り立つとしている(なおこの海峡は19世紀にジェームズ・クックにより完全な調査がなされ、この時はじめて「ベーリング海峡」と名付けられた)。この仮説を裏付けるものとしてドップズが挙げるのが、ケンペルが持ち帰った日本製の世界図すなわち『万国総界図』で、この地図にはその間に2つの島が描かれているのだという。ベーリングの探検によって日本から東方約375km(当時の1ドイツマイル=7.5km、1イギリスマイル=1.5kmで換算)ほどの地点で島らしきものが発見されており、これが『万国総界図』にしめされたものかもしれないと考えているのである。

[2] フィリップ・ブアシェによる報告

その後、フィリップ・ブアシェ⁶⁴ はロイヤルソサエティーの研究会においてケンペルの持ち帰った『万国総界図』に関する発表を行った。図25上図のタイトルには「ケンペルによってヨーロッパにもたらされ、ロンドン王立協会会長故ハンス・スローン氏の陳列室に保管されている日本の地図より、日本あるいはアジアの北東とアメリカの北西の陸地の抄出」とある。この図についてブアシェは、

それは卵形で、そして日本が中心にある。そこにある国々の名は、一部は中国語で書かれており、一部は、世界の他の部分についてヨーロッパ人が彼らに伝えたものとともに日本語で記されている。したがって、私には、この地図はマテオリッチ神父が、自分たちが世界の中心であり、また全ての島や国々の代表者であると信じている中国人のために、1585年に描き、またトリゴー Trigault 神父⁶⁵ (『キリスト教徒の旅』2巻6章)が持ち帰った地図をモデルにして描いたと推測できるように思われる。私はこの図の岬の点線、終わっていない北東アジアあるいは日本人が呼ぶ奥エゾ(あるいは高エゾ)そして中国の Ta-han を続ける。なぜなら、私はケンペル(筆者注:の著書)に与えられている、ケンペルが帝国の王都である江戸において見た、より完全な地図のように日本人が日本の北部に置いている国々の記述を利用しなければならぬと信じているからです⁶⁶。

と説明している。原図はマテオリッチが1585年に作成した地図(『坤輿万国全図』出版は1602年)としており、また点線で示されているカムチャツカ部分は『日本誌』に述べられている、ケンペルが江戸で見たという世界図に関する報告を元に付け加えられたものであり、ブアシェが所蔵していた写しには元々描かれていなかったとしている。また*で示された地名は、ブアシェが読者の理解を助けるために附したものである。続けてブアシェはこの地図を以下のように読み解いている。

- (1) この著者(筆者注:ケンペル)がこの議題と日本人の帝国の東の航路(私の地図のそれに関する抄録 *Extraits* を見ればわかるように)について考え、示していることは、東に住む人々がアジアとアメリカを分ける海峡に関する知識を持っていることを知らせてくれる。それはベーリングの島であり、またその北端には、もうひとつ島が両大陸からそう離れていない位置にある。両大陸はほぼ(それらによれば)その2つの端に接触しており、北東の地点から、彼らの航路の中間地点の、半日東にある(上述12頁)。
- (2) ケンペルが言う、日本人がアメリカと対岸の奥蝦夷(あるいはシベリア)の東岸に配置する大きな正方形の湾 *Golfe quarré* は、私が大雑把に日本の図の見解の中で述べたように、ロシアが最近出版した、シベリアの沿岸が修正されている地図によると相変わらず残されている。これらの説明の最初の部分を伴うニュルンベルグの地図はまた、この正方形の湾を示し、際立っているだけより一層正確ではないが、アジアの北東部に与えた最初の考えの一つとしてそれだけいっそう評価できる。
- (3) 海峡からカリフォルニアの地点までのアメリカの沿岸は、私が古い地図の中で特にプチョチョツキ *Puchochotskes* の発展した島であるものと比較して証明したので、日本の図によりずっと似ている。この島の緯度はチリコフとクロワール・ドリールの航海により示された⁶⁷。(通し番号は筆者による)

(1)についてブアシェ附図の「ケンペルの抄出 *EXTRAIT de KAEMPFER*」にはケンペルが日本人から聞いたという北太平洋地域の情報⁶⁸ の内容が抄出されている(図25解説文を参照)。これは仏語版『日本誌』の5巻14章からの抄出である。ケンペルは日本人もこの地域に関する確かな情報は持っていないと譲歩した上でこれらを記述している。しかしながらブアシェは、ケンペルの記述から「東に住む人々」すなわち日本人を含む東アジア世界の住人が「アジアとアメリカを分ける海峡に関する知識を持っている」と断定する。(2)の正方形の湾というのは、日本の北方、カムチャツカ半島東部

とアメリカ大陸北西沿岸部の間にあるという湾で、この部分に関する説明は英語版、仏語版、蘭語版そしてドーム版のいずれにおいても見られるものである(訳文は本稿2章に引用の『日本誌』5巻14章を参照)。ブアシェは『日本誌』の記述に見合うように正方形の湾を描いている。この湾が描かれているという「ロシアが最近出版した、シベリアの沿岸が修正されている地図」はベーリング探検隊の報告を元に1745年ロシアアカデミーによって作成された『ロシア帝国地図帳』を、また「ニュルンベルグの地図」というのはヨハン・バプティスト・ホーマン Johann Baptist Homann「カムチャツカすなわちエゾ図」(1725年)⁶⁹を表していると考えられる。後者はショイヒツァーの手によってケンペル『日本誌』附図の第8図「68州に分けられた日本地図」の紙面左上に採用されている(仮にホーマン-ショイヒツァー図と呼ぶ)。ホーマン-ショイヒツァー図では本州のすぐ北にカムチャツカが配置され、蝦夷地の名前はなくなっている(なお、ホーマンの図では半島内部にカムチャツカあるいはエゾ KAMTZALIA sinis JEDSOと書いてある)。(3)に述べているプチョチョツキ Puchochotskes というのはホーマン図およびホーマン-ショイヒツァー図にみえる島で、これが「日本の図」すなわち『万国総界図』に表されたアメリカ大陸北西岸に描かれた島と一致する(図7参照)。これらの情報から、アジア-アメリカ間はごくごく狭い海峡で隔てられ、その間に架かる橋のような島が1つ存在しているというのが北太平洋地域の状態であるとブアシェは考えているようだ。

図7 ホーマン-ショイヒツァー図



紙面右上にPuchochotskesという島が描かれている。

図25下図のタイトルには「アジアの沿岸とアメリカの沿岸を加えた、南海北部の陸地について最近知られた地図。1752年8月の王立協会の学会で発表された図の縮図。ドギーニュ氏が中国の年代記から引用した地理学的知識によって附された、中国人が西暦458年ごろにアメリカに行った時の航路つき。」と記されている。これはロシアアカデミーのジョゼフ・ニコラス・ドリール Joseph Nicolas Delisle⁷⁰が第2次ベーリング探検のために作成した地図を元に、ブアシェが補正を加えたものである。図の中央部分にアメリカ大陸北西部から南西に向かって伸びる舌状の半島が見られるが、これはベーリング隊が濃霧のため一連の陸続きと誤認したアリューシャン列島を表している。この舌状に伸びた半島の先には *Terre déc. en 1741 par les Russes*. すなわち「1741年にロシアによって発見された陸地」と記入されている。その南東方向、カムチャツカ半島の南方の海上には「Kia-y」とその南部のみが実線で描かれた島が記され、「ジュアン・デ・ガマが見た海岸 *Côte vue par J. de Gama*」という説明が附されている。『万国総界図』の部分図である上図には、「Kia-y-tao」が本州の東方に描かれており、これは『万国総界図』に記された「蝦夷島」に相当することがわかる。Kia-y-taoというのは蝦夷島を中国語発音⁷¹で表記したものと思われる。ブアシェはこの島を *Terre de J. de Gama* すなわち「ガマの陸地⁷²」に比定する。

ガマの陸地はテイセラの地図(1649年)に見られる、「ジュアン・デ・ガマの発見した陸地」とされるものが初見であるという⁷³。これは蝦夷地の東方に配置されている。テイセラの説明によるとジュアン・デ・ガマはスペインからノヴァ・イスパニア(北アメリカ大陸)を連絡して航海していた船員であるという。彼についてはこれ以上に詳しくは語られていないが、これはテイセラ以後の地図にも形や配置を変化させつつ、架空の陸地として受け継がれている。ガマの陸地は蝦夷地の東方に描かれていることから、しばしばカンパニーランドと同一のものと理解されることもあり、さらにアメリカ大陸とつながっているのではないかと考えられることもあった。1741年の第2次ベーリング探検の際に作成されたJ.N.ドリールの地図を見ると、このガマの陸地はアメリカ大陸北西部から南西に向かって伸びる巨大な半島と考えられていたことがわかる⁷⁴。しかし、ベー

リング探検の報告によりガマの陸地の存在は疑問視されるようになった。以下にあげるのはベーリング隊の船員の一人であるワクセルによる報告書である。

例のあてにして来た地図(筆者注:J.N.ドリールの地図)は、まったくでたらめなものであることがはっきりしてしまった。それにしてもユアン・デ・ガマス・ランド(筆者注:ガマの陸地)などという突拍子もない土地は、どこから思いついてこのあたりに描出されたものであろうか。われわれは鳩首して語り合ってみた結果、おそらくは、すでに第8章でも述べたように、エゾJessoの名を聞きつたえていたので、その位置をたしかめもせずに、想像をたくましくしてこの辺に配置してみたものと判断することが、まず妥当な推論でもあろうかということに落ち着いた⁷⁵。

ベーリング探検隊はJ.N.ドリールの地図をもとに探検を行ったのであるが、この地図はベーリング探検以前のヨーロッパにおける地理学的知識の集大成であった。この地図において、ガマの陸地はアメリカ北西部から伸びる半島のようにぼかして描かれていた(なお、先に引用したブアシェの下図はJ.N.ドリールの地図を元に作成されている)。航海の結果ガマの陸地は発見されず、ワクセルはこのJ.N.ドリールによる地図を荒唐無稽のものと考えたようになった。特にガマの陸地は蝦夷地と混同され、さらに想像のもとにアメリカ大陸とアジアの間に配置されたものだと結論づけている。ワクセルと同じベーリング探検隊の内、日本方面への探索をおこなったシュパンベルグ隊の船員であるステラーは、ガマの陸地を島と考えていた士官たちを「間抜け」と評する⁷⁶。ステラーの場合、J.N.ドリールの地図におけるガマの陸地をアメリカ北西部から太平洋上に東西に伸びた半島の西端の海岸部分であると解釈していたからである⁷⁷。一方、ガマの陸地は巨大な島あるいは陸地と空想されていたにも関わらず、士官たちは航海の途中で発見したわずか幅15マイルほどしかない小島をガマの陸地と考えていた。ステラーはこれを指して間抜けと評し、また航海の後にはガマの陸地の存在を否定したのであった。さて、ブアシェは、

ジュアン・デ・ガマによって発見された陸地に関してはエゾあるいはむしろカンパニーランドの東に配置される他には、私に残された言うべきことはない。ロシア海軍の士官は私たちが地図に残したこの疑わしい陸地と、その近くで行われたその国(筆者注:ロシア)の調査への否定についてまだ非難を浴びせている。彼はベーリング卿とチリコフが1741年にカムチャツカの南東、緯度46度、経度190度まで行った航海について論じたがっている。しかし彼らがこの場所で発見したものは彼らが探したアメリカの北西の延長部分のようなガマの陸地の名残りもなく、このことからジュアン・デ・ガマが発見した海岸は、もっと西にある島で、そして我々の地理学者たちの数名が推測しているものよりもそんなに西には延びていないと考えられる⁷⁸。

と、ベーリング探検の結果、ガマの陸地らしきものが見つからなかったことからロシア側においてその存在が疑問視されていることを述べている。しかしブアシェはガマの陸地が、ベーリングたちが発見した陸地とは異なるものと考え、さらにその西方の海上にあるものと考えている。ブアシェが批判するのはこれまでの地理学者たちが、蝦夷地とカンパニーランドとガマの陸地を混同してきたことである。そして「カムチャツカの地点の南において真っ直ぐ航海し、彼らによってナジェジダ(あるいは希望)と呼ばれた島の東に何かがあるのかを調査せねばならない⁷⁹。」と、ベーリング探検隊がカムチャツカから真南に航海しなかったことに対しても批判を加えている。すなわち、ブアシェはガマの陸地がカムチャツカの南にあると考えているのである。また、ブアシェはドギーニュの論を援用し、西暦458年に中国人によってアジアからアメリカ大陸への航海がなされたことを紹介し⁸⁰、さらにその航路を下図に書き入れている。その航路が“Kia-y”もしくはガマの陸地の北部であることから、ガマの陸地はアメリカ大陸につながっているものではなく、島として記されている(ただし、島の大きさおよび北端は不明であるために、点線で記されている)。そして、

ガマの陸地の地図上での初見は、ポルトガル王付きの天文学者として知られるテイセラが1649年にリスボンで作成し、ポルトガルのすべての水先案内人に与えられたインドの地図である。証明に加え、すぐれた国の記録が記されているが、そこには日本から10あるいは12度北東、そして緯度で44、45度あたりに群島と、東のほうに走る海岸が、以下の説明とともに記されている。「中国から新スペインまで往来した、インド人のジュアン・デ・ガマが見た陸地」と。そもそもいつ行われた航海かも、またこの場所でおこなわれた観測の性質も知られていない。しかし、その結果この陸地の存在を否定できるであろうか？ それらをこの場所に置いたのはポルトガルだけではない。それらはまだ中国や日本の地図にあり、Kia-y-taoの名前でよく知られているようで、その東には他にいくつか小さい島があるのを私が出版した「日本の地図」と「エゾ周辺図」に見ることができる。今日では中国人と日本人がこの海域の状態を知らないと批判することはできないであろう⁸¹。

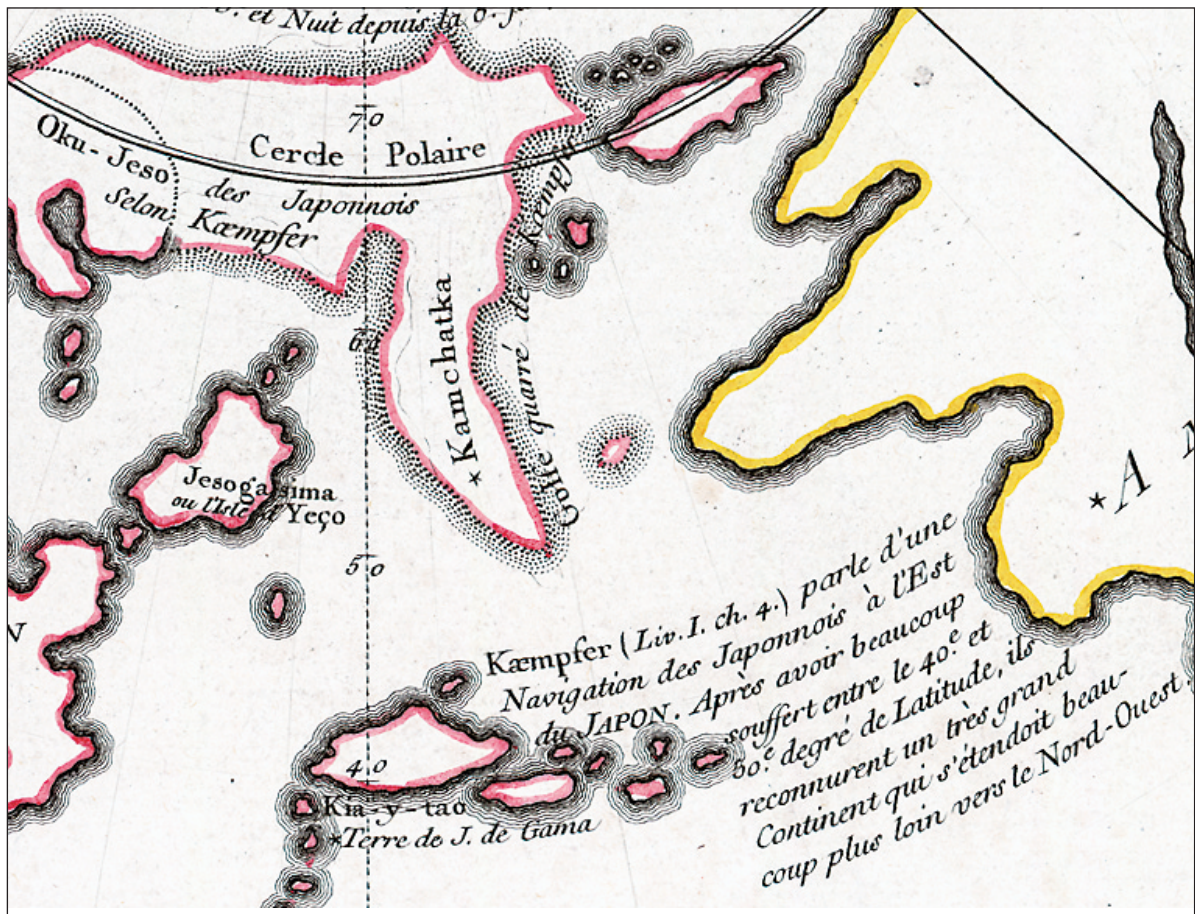
と述べ、テイセラによって描かれたガマの陸地が、ケンペルが持ち帰った日本製の世界図に描かれていることが、ブアシェのガマの陸地に関する持論を補強していたことがわかる。ブアシェはケンペル『日本誌』の仏語版から引用した文章をKia-y-taoもしくはガマの陸地の右に載せている(図8参照)。この箇所は1巻4章から抄出されたもので、該当箇所を挙げておくと、

*On partit des Côtes Orientales du Japon, & après avoir beaucoup souffert entre le 40. & le 50. degré de Latitude Septentrionale, on découvrit un très grand Continent, qu'on supposa être l'Amérique, où ayant trouvé un bon port, on y passa l'hiver, & on revint l'année suivante sans pouvoir donner la moindre description de ce pays, ou de ses habitants, si ce n'est qu'il s'étendoit beaucoup plus loin vers le Nord Ouest.*⁸²

である。一重線の部分が抄出箇所であるが、ケンペルの意見である破線部「これはアメリカであると思われる⁸³」の部分は省略されている。したがって、ブアシェはケンペルの記述と『万国総界図』を併読することによって本州の東海上に位置する「蝦夷島 Kia-y-tao」をアメリカ大陸の延長ではなく、ガマの陸地であると判断したと考えられる。先述の通り、ブアシェは『日本誌』に記された、ケンペルが日本で得たという北太平洋地域の状態に関する記述を読み日本人は確かにこの地域に関する情報を持っていると確信していた。そして、『日本誌』に記された、日本船が北緯40度から50度の間で日本人が島を発見したという記録と、テイセラが記したジュアン・デ・ガマが見たという陸地に関する記述が一致することに気づいた。そして日本人が自らの知識に基づいて作成した(とブアシェが考えた)世界図『万国総界図』に描かれるところの「蝦夷島」Kia-y-taoの配置を見て、ガマの陸地の実在説をと考えたのであった。

こうしたブアシェの論は、批判を受けることもあれば、また受け入れられることもあった。前者の代表がドイツ人歴史学者ゲルハルト・フリードリヒ・ミュラー Gerhard Friedrich Muellerである。ミュラーはロシアアカデミー所属で、第2次ベリング探検にも参加していた。その著書『ロシア史集成』は非常に有名である。この全9巻の著書の内、第3巻は『アジアからアメリカへの航海』⁸⁴ という題名で1761年に王立協会のトマス・ジェフリズによって英訳出版された⁸⁵。先ほどのブアシェ論文の引用箇所に出てきた、ブアシェを批判する「ロシア海軍の士官」とはミュラーのことを指している。ミュラーはベリング探検の元となったドリール作成の地図に対して「(ガマの陸地は)実際には日本かあるいはエゾの中へ置くのが本当であった」と考え、「現在ではガマの陸地は地理学者にはまったく認められないか、あるいはきわめて縮小され日本とカンパニーランドとのごく近くに置かれていて、ガマの陸地とカンパニーランド間にはなんらの違いもなくなっているかのいずれかである」と述べている⁸⁶。つまり、ジュアン・デ・ガマが見た陸地というのは本州北部に存在する蝦夷地のことであったというのがミュラーの考えであったようであるが、これは航海をともにしたステラーやワクセルにも共通するのは前述のとおりである。

図8 プアシェ図北太平洋周辺



アメリカ大陸とアジアの間はこの海峡に蓋するように描かれた島の存在によってごくごく狭い海峡になっている。この島はホーマン図にあらわれるブ
 チョチョツキと考えられている。Kia-y-taoの右には仏文で「ケンペル(1巻4章)は日本東方への日本人の航海について言及している。40度と50度の
 間を大いに難航した後、彼らははるか北東の方面にのび広がっている、とても大きな大陸を見た。」と書いてある。

また、この著書の英訳者であるトマス・ジェフリズはこの論文の独語原著には附されていない、『万国総界図』の縮図を
 掲載した(図9参照)。これはプアシェが紹介した地図の焼き直しであるが、記述については仏語から英語に改めてある。
 例えば、ジュアン・デ・ガマの陸地 Terra de J. de Gamaはガマ・ランド Gamas Landに改訂し、その上には Kia-i-taw⁸⁷ と
 記している。北極付近の Pais de la Nuits(夜の国)が the Dwarf Kingdom(小人の王国)になっているような間違いも
 みられる。これは仏語 Nuits(夜)を Nains(小人)と見間違えた結果であろうと思われる。ジェフリズは自らが加えた地図に
 関する説明の中で、

第一は、日本作成の世界地図の写図である。これは以前はハンス・スローン卿のコレクションで、現在は大英博物館の
 所蔵である。この地球の同じ部分に関しては、最も主要な部分に関して、本書で述べられているロシア側の意見と一致す
 る⁸⁸。

として、『万国総界図』縮図と、ベアリング探検隊の調査報告との一致を認めている。『万国総界図』の縮図はデイドロ、ダ
 ランベールらが編纂した『百科全書』の図版編の中にも引用された⁸⁹。1788年にはドゾシェによってプアシェ図の改訂版が
 出されるなど、18世紀半ばから後半にかけて影響力を持った。

図9 トマス・ジェフリズによる附図



タイトルには「ケンペルによって将来され、後にハンス・スローン卿の博物館に収められた日本製の世界図から引用した、日本に関する位置を示すアジア北東部およびアメリカ北西部の地図」とある。

6. J.H.クラプロートの『万国総界図』研究

[1] ユリウス・ハインリッヒ・クラプロートと『万国総界図』

その後、19世紀に入るとドイツ人東洋学者ユリウス・ハインリッヒ・クラプロート⁹⁰ によって『万国総界図』の全体図が紹介された。この図は先に述べたとおり、ハンス・スローン卿が作成したケンペル旧蔵『万国総界図』の写しである。クラプロートはこの『万国総界図』の写しを手に入れ、論文集『アジアに関する紀要』の第2巻にその解説とともに収録した。論文中には、『万国総界図』の作成に「ヨーロッパの古地図」、具体的には『オルテリウスの地図帳』⁹¹ (1570)が利用されているだろうと述べられている。クラプロート所蔵の『万国総界図』は写しであったために、題名及び出版年は明らかでなかったが、クラプロートは出版年が1644年から1692年の間であることを示した。また本論の中では国名、地名の比定を行うなど、総じてクラプロートは「この地図とは何か」ということを即物的に叙述しようとしているように思われる。これはケンペルやフィリップ・ブアシェらが『万国総界図』あるいは日本人が作成した世界図を、北太平洋地域の地理情報を伝える貴重な資料として読み解いたものとは対照的である。クラプロートの生きた19世紀にはフランス人ラ・ペルーズやクックによる航海によ

て北太平洋の地図はかなり正確になっており、18世紀までの北太平洋海域の情報が混乱していた状況とはおのずと異なっていたのである。

クラブロートが入手した『万国総界図』写しはもともと漢字とカタカナで書かれていたという。ただし、図や説明書においてはすべてローマ字表記に改めてある。漢字で示された地名の場合は中国語発音と日本語発音を併記している。クラブロートは14歳にしてバイエルの『シナ雑纂』やメンツェルの『シナ語彙』などを手引きに中国語を学び始めた。中学入試の口頭試問の際に、簡単な質問に答えられないクラブロートに試験官が「君は何も知らないのか?」と聞くと、それに対して「しかし私は中国語を知っています。しかも私は誰にも教えを受けず、独力で通ずることができました」と答えたのは有名である。また1805年にクラブロートは、ロシアのイルクーツクで日本語教師をしていた日本人漂流民の新蔵から日本語を学び、『日本王代一覧』、『三国通覧図説』、『宝貨事略』など日本語文献をかなり正確に仏訳している。彼の業績を関するにこうした中国語、日本語の素養はかなりあったと思われる。

[2] クラプロート図の分析

クラプロート図にはMAPPEMONDE JAPONAISEすなわち「日本製の世界図」とタイトルが掲げられている。その下に筆記体でRéduite d'après un original du Musée britanniqueとあるのは「大英博物館の原本による縮図」の意味である。原本による縮図とはいうものの、実際に掲載されているのはブアシェもしくはドギーニュ旧蔵の写しである。世界図の左上、右上にそれぞれMém.s. l'Asie par Klaproth. Tome III, Page 480.とあり「アジアに関する紀要 クラプロートによる」「3巻 480ページ」と記されている。また世界図の下部にはそれぞれLithogié., chez R. S. Siebenmann. / Litrairie Orientale de Dondey-Dupré Père et Fils, rue Richelieu, No., 47 bis. / Impie., de Sennefelder et Cie., .とあり石版印刷元のR. S. Siebenmann、出版元であるDondey-Dupré Père et FilsとSennefelder社が記されている。

以下ではクラプロート図に示された地名や説明書きと大英図書館所蔵『万国総界図』のそれとの比較を行う。ただし、論文所載図と、本文の説明書きにおける地名表記が異なることがある。例えば本州内の南部に示された「長門」に関していえば、図中ではNagatoと示されているが、本文ではNangataと表記されている。異同については本稿末尾のクラプロート論文の全訳を参照されたい。地域区分はクラプロートの分類にしたがって「アジア」「ヨーロッパ」「アフリカ」「アメリカ」とし、『万国総界図』に見られる地名は【 】で括弧で表記した。*を付したものはこれらの区分に含まれていないが、便宜上これに含めた。

アジア

図10 日本周辺図

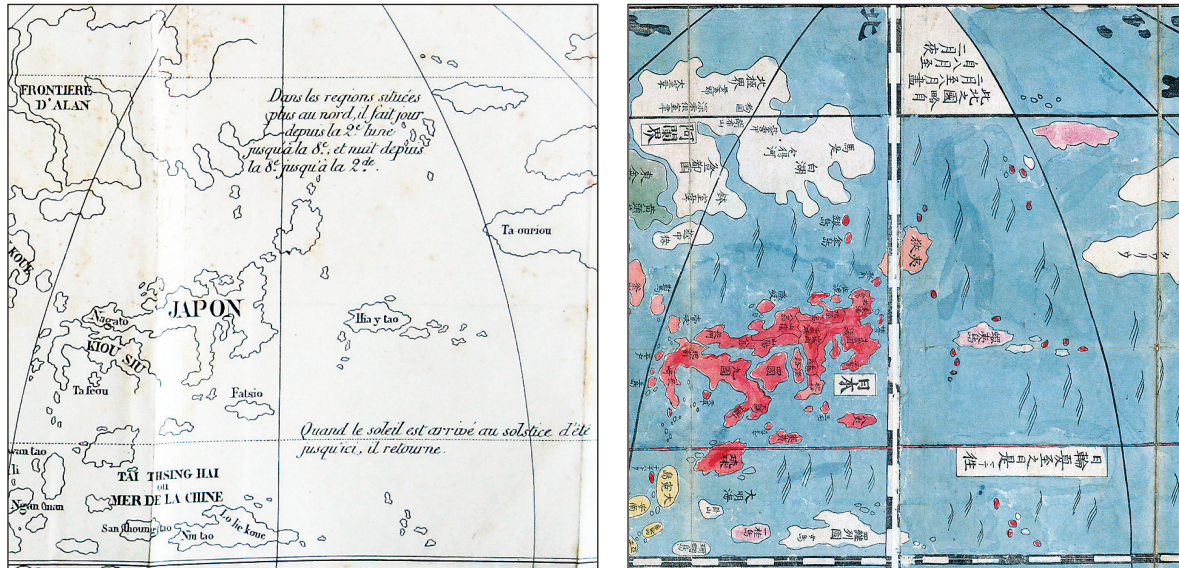


図11 東アジア 北アジア

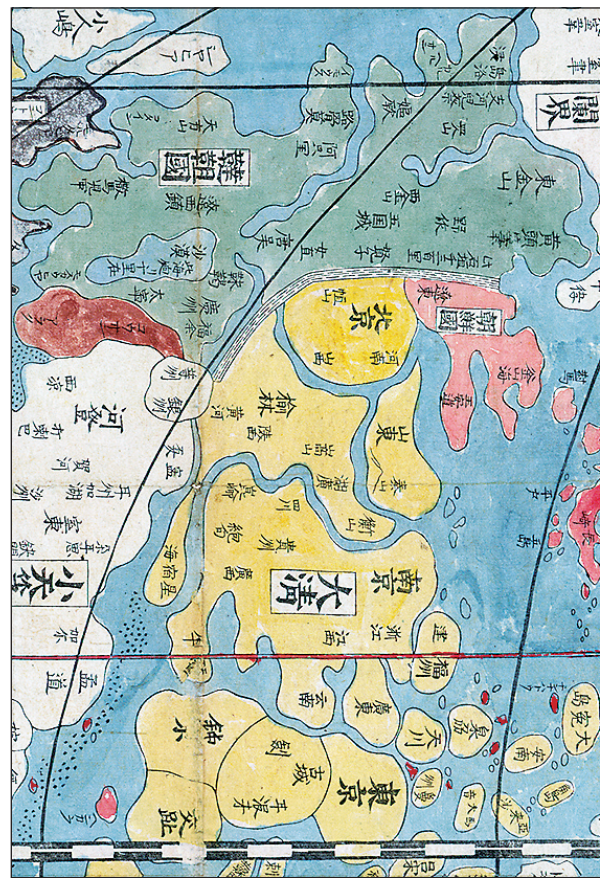
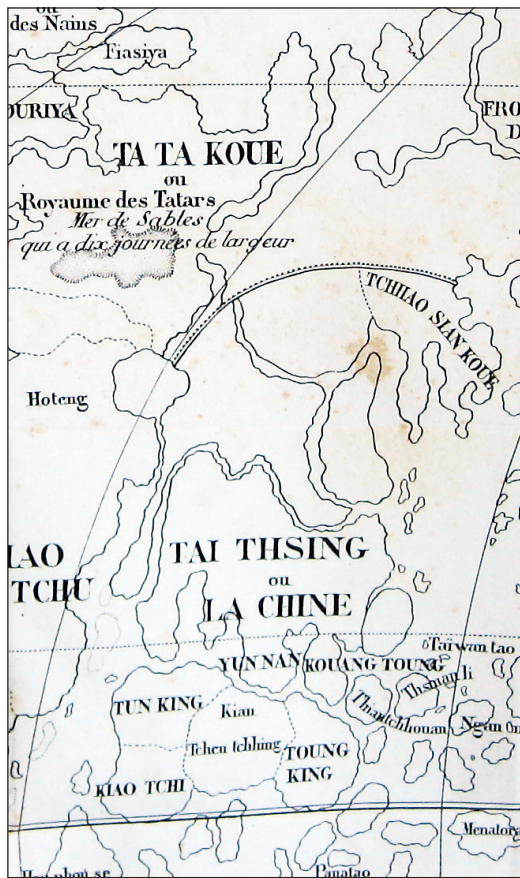


図12 東南アジア1

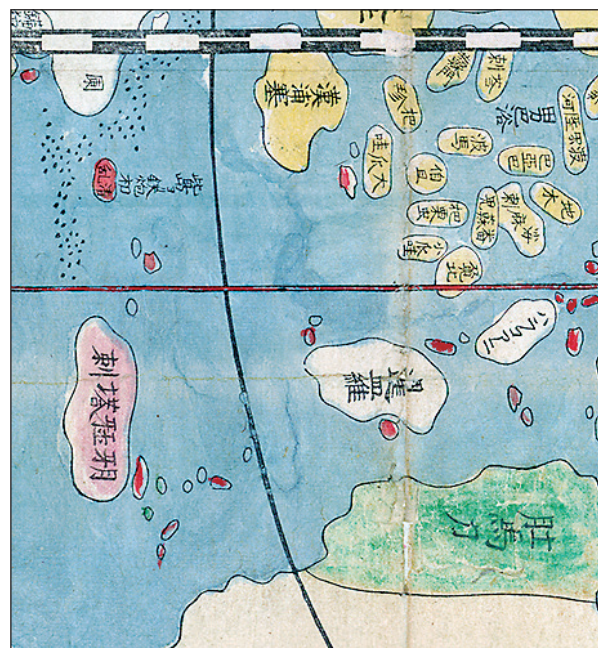


図14 東南アジア2

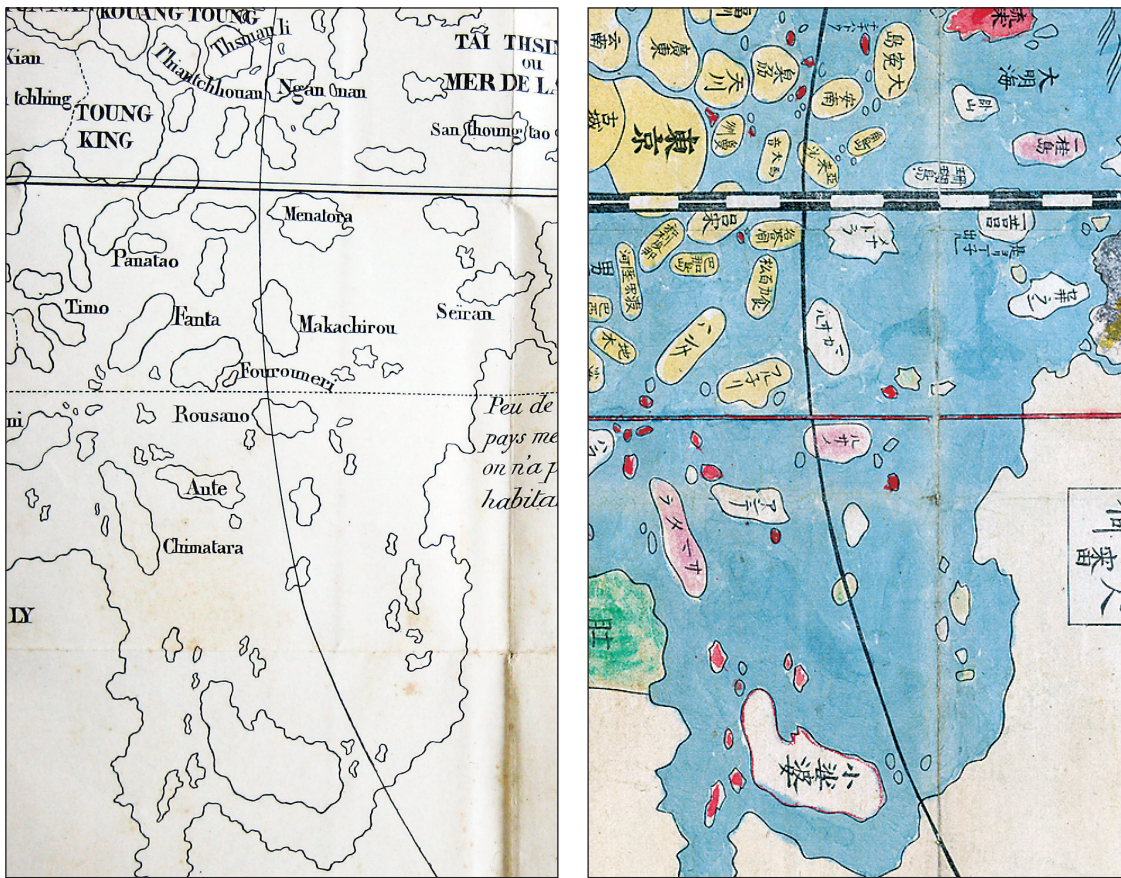


図13 西アジア 南アジア

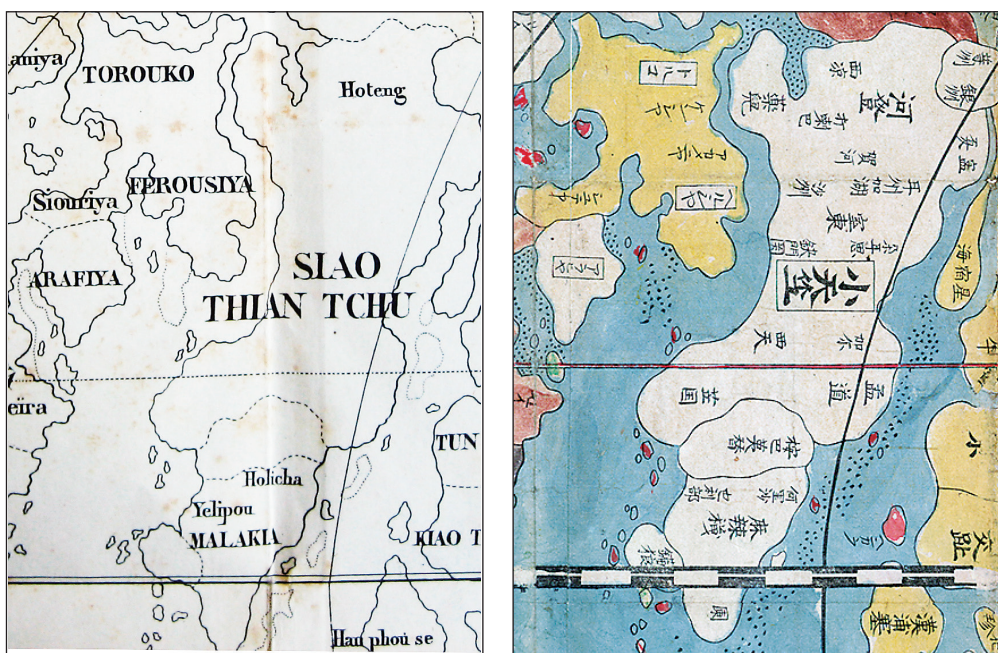


表1 地名比較 アジア

No.	クラブポート			万国総界図	備考
	地図上の表記	地名比定①	地名比定②		
[1]	JAPON	Jy pen	Nippon	日本	
[2]	Nagato	Tchhang men	Nangata	長門	
[3]	KIOU SIU	Kieou koue	Kiou siou	九國	
[4]	Ta feou	Thian thsao	Amakousa	天草	
[5]	Fatio	Pa tchang	Fa tsio	八丈	
[6]	Hia I tao	Hia i tao	Ieso	蝦夷島	
[7]	FRONTIERE D' ALAN	A lan kiai	frontière d' Alan/ Alanの境界	阿蘭界	
[8]	TA TA KOUE ou Royaume des Tatars	Tha ta koue	Pays des Tatars/ タタールの国	韃靼國	
[9]	Mer de Sables qui a dix journées de largeur			此海廻り十里在 沙漠	
[10]	TAI THING ou LA CHINE	Tai thsing koue		大清	
[11]	KOUANG TOUNG	Kouang tounng		廣東	
[12]	YUNNAN	Yun nan		云南	
[13]	TCHIAO SIAN KOUE	Royaume de Tchhao sian/ Tchhao sianの王国	Corée	朝鮮國	
[14]	Tai wan tao	Ile de Tai wan/ Tai wanの島	Formose/ フォルモーサ	大宛島	Formoseは台湾島の別称 で、美麗島の意
[15]	TAI THSING HAI ou MER DE LA CHINE	Mer de la Chine/ 中国の海		大明海	
[16]	San thoung tao			珊瑚島	一桂島の位置に配置
[17]	Niu tao	Ile des Femmes/ 女性の島		女島	
[18]	Lo lie kou			羅列國	
[19]	Thiao Tehhouan			天川	
[20]	Thsiuan ly			泉苧	
[21]	Ngan nan			安南	
[22]	TOUNG KING	royaume de Tonquin/ トンキンの王国		東京	
[23]	Kian			劍	
[24]	Tchen tchhing			古城	占城(チャンパー)の誤植か?
[25]	TUN KING			鈍京	
[26]	Kiao tchi	Cochinchine/ コーチシナ		交趾	
[27]	Han phou se	Cambodje/ カンボジア		漢浦塞	
[28]	Ta khoua wa	grande Java / 大ジャワ		大爪巴	
[29]	Siuan lo	Siam/ シヤム		暹羅	
[30]	Farakoani			ハラコアニ	
[31]	Chimatara	Sumatra/ スマトラ		サマタラ	
[32]	Ante	Ende/ エンデ		アンテ	
[33]	Rousano	Luçon/ ルソン		ルサノ	万国総界図に「呂宋」も見 られる
[34]	Fourouneri			ホロ子リ	ボルネオ
[35]	Makachirou	Macassar/ マカッサル		マカサル	
[36]	Menatora			メナトラ	
[37]	Fanta	Banda/ バンダ		ハンタ	
[38]	Seiran	Ceran/ セイロン		セ井ラン	
[39]	Ti mo	Timour/ テイモール		地木	
[40]	Pa na tao	ile de Banda/ バンダ島		巴那島	
[41]	SIAO THIAN TCHU			小天竺	
[42]	Ho li cha			何里沙	
[43]	Ye li pou			也利部	
[44]	Ma la kia	Malacca/ マラッカ		麻辣襪	
[45]	SO MUNG THA LA	ile de Sumatra/ スマトラ島		朔狂塔刺	万国総界図に「ジャガタラ」 のルビあり
[46]	TOROUKO	Turquie/ トルコ		トルコ	
[47]	Siouriya	Syrie/ シリア		シユテア	ユダヤ
[48]	ARAFIYA	Arabie/ アラビア		アラヒヤ	
[49]	FEROUSIYA	Perse/ ペルシア		ヘルシヤ	
[50]	Hoteng	source du Houang ho/ 黄河の源流	Khoten/ 和闐	河登	
[51]	TAN MA LY	Maletur		肚馬力	*

図10において『万国総界図』に示されている【四国】と【淡路島】は省略され、さらに九州南部は途中で途切れている。

[6] Hia I taoは【蝦夷島】のことで、クラブロートは「エビを持つ野蛮人の島」と文字通りの意味に解している。さらに「日本語ではIesoという。私達の地図では日本の北方ではなく、誤って東方に示してある。」と述べている。19世紀には蝦夷地の位置に関して探検にもとづいた知識がもたらされていたため、クラブロートは『万国総界図』の誤った「蝦夷島」の配置に気付いたのである。

[7] FRONTIERE D'ALANすなわち「アランの境界」は、『万国総界図』には【阿蘭界】と記されており、これは中国東北部を示す「オランカイ」すなわち烏梁海 Wu liang haiの発音に基づいた当て字である⁹²。

[15] TAI THSING HAI ou MER DE LA CHINEは「大清海あるいは中国の海」の意味で、『万国総界図』には【大明海】と記されている。

[16] San thoung tao【珊瑚島】は、クラブロート図では『万国総界図』における【一桂島】の場所に誤って配置されている。

[24] Tchen tchhing【古城】というのは占城(チャンパー)の誤植であろう。

[44] Ma la kia【麻辣襪】をクラブロートはマラッカと比定しているが、この地方がインド半島に配置されていることからこれは誤りである。マラッカの漢字表記は「満刺加」「母羅伽」などが一般的である。

[45] SO MUNG THA LA【朔猛塔刺】は「日本肥前国ヨリ諸国島遠近在渡海分之通乗」の「朔猛塔刺」によると、「シヤカタラ」というルビが附されている。これはジャガタラすなわちジャカルタのことで、オランダ東インド会社の拠点であるバタヴィアを表している。クラブロートは「搭刺」=THA LAという語尾からスマトラと比定したのでであろう。ちなみに西川如見『増補華夷通商考』⁹³(宝永6(1709)年序)をはじめとして、江戸期の地誌類に出てくるスマトラの漢字表記は「蘇門答刺」「蘇門答刺」「蘇門塔刺」などが多く、『万国総界図』では【蘇門】と【答刺】の二島に分けて配置されている。

[47] Siouriya【シユテア】をクラブロートはシウリアと読み、シリアに比定しているが、これは誤りである。『坤輿万国全図』には「如得亞」と書かれており、その左下に説明書として「天主降生(こうしょう)是地における故、人これを聖土と謂う」(読み下し)とあることから【シユテア】はユダヤを指すと考えられる。

ヨーロッパ

図15 ヨーロッパ

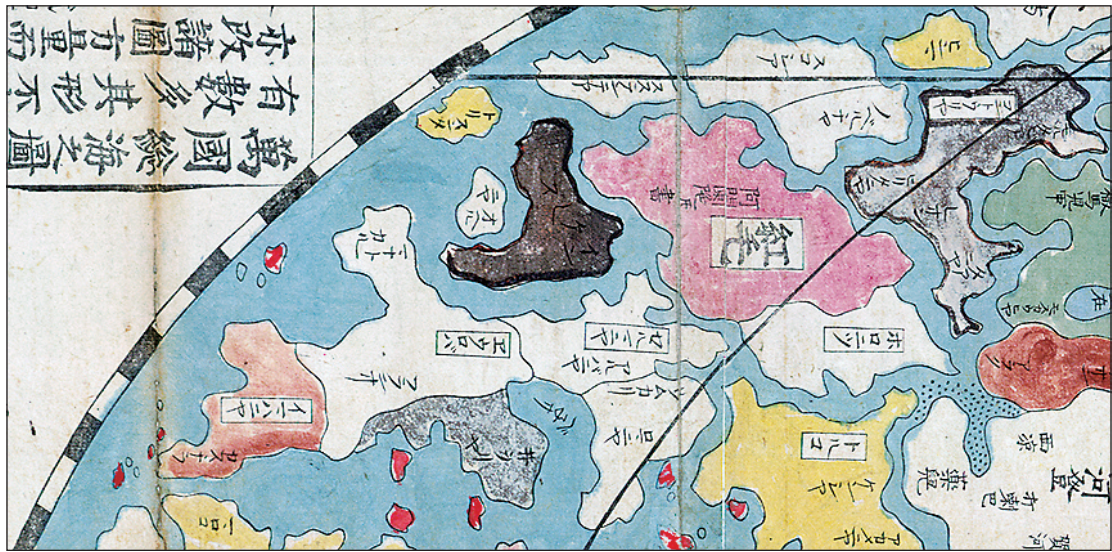


図16 北ヨーロッパ



表2 地名比較 ヨーロッパ

No.	クラブポート			万国総界図	備考
	地図上の表記	地名比定①	地名比定②		
[52]	YEOUROPA	Europe/ヨーロッパ	France	エウロバ	
[53]	HOUNG MAO ou POILS ROUGES	Hollandais/オランダ		紅毛	HOUNG MAOは紅毛のピンイン表記。 POILS ROUGESは赤い髪 の意
[54]	Manatokarou			マナトカル	
[55]	ISIFANIYA	Espagne/イスパニア		イマハニア	
[56]	Kasoutera	Castille/カスティーリヤ		カスチラ	
[57]	Itariya	Italie/イタリア		井ヲリヤ	
[58]	Inkeresi	Angleterre/イギリス		インケレス	
[59]	Iferounia	Hibernia/イベルニア		オヘルニヤ	トリスンタの位置に配置してある
[60]	Isouranteya	Islande/アイスランド		ススランテア	
[61]	Souesiya	Suède/スウェーデン		スコシア	
[62]	Noferoutsia	Norwège/ノルウェー		ノベルチヤ	
[63]	Seroumaniya	Allemagne/ドイツ		セルマニヤ	
[64]	Aroufania	Albanie/アルバニア		アルバニヤ	
[65]	Fenesa	Venise/ヴェニス		ベ子サ	
[66]	Romaniya	Turquie d'Europe/ ヨーロッパのトルコ		ロマニヤ	ルーマニア
[67]	Foronitsou	Pologne/ポーランド		ホロニツ	
[68]	Finma	Finmarc/フィンマルク		ヒンマ	
[69]	KONTOOURIYA	Russie d'Europe/ ヨーロッパのロシア		コントウリヤ	
[70]	Siao jin tao ou Ile des Nains			小人島	Siao jin taoは小人島のピン イン表記。Ile des Nainsは 小人の島の意
[71]	Fiwafia	Fiasia	Siwafia	シヤヒア	
[72]	YE KOUE ou Royaume de la Nuit			夜国	*

[59]Iferounia【オヘルニヤ】をクラブポートはイベルニア(アイルランドのラテン名)と比定している。しかし、クラブポート図においては『万国総界図』における【トリスンタ】の位置にIferouniaを配置している(図15参照)。なお【トリスンタ】は「ヒリスンタ」と記されることもある。これは北大西洋の架空の島であるフリスランドFrislandの音訳であると考えられる⁹⁴。

[60]Isouranteya【ススランテア】はアイスランドのことで、クラブポートは第一文字目の「イ」を「ス」と誤読している。

アフリカ

図17 北アフリカ

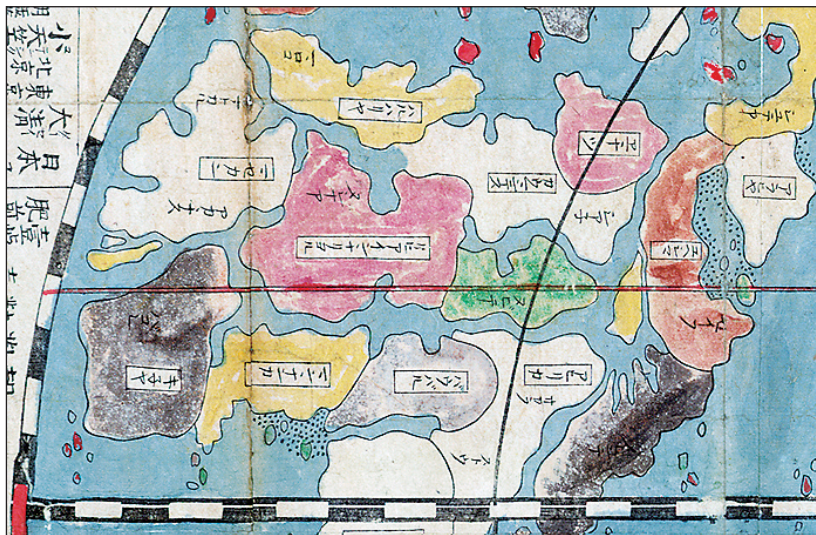


図18 南アフリカ

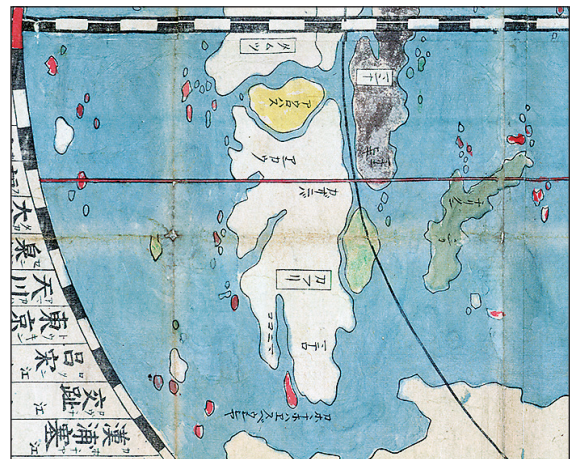
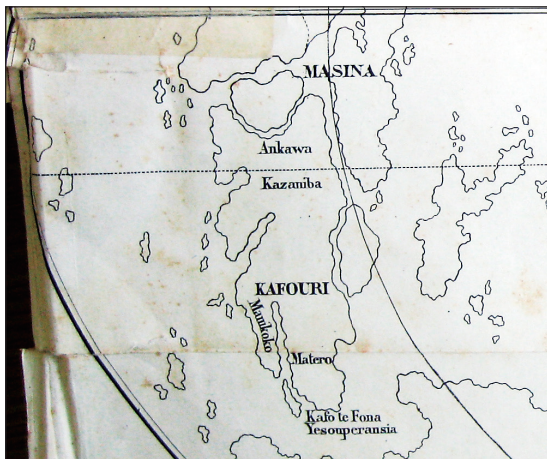


表3 地名比較 アフリカ

No.	クラブレポート			万国総界図	備考
	地図上の表記	地名比定①	地名比定②		
[73]	AFRIKIA	Afrika/アフリカ		アヒリカ	
[74]	MAROKAN	empire de Maroc/ モロッコ帝国		マセカン	
[75]	Akatsisou	Auzichi		アカチス	
[76]	Natokarou			マナトカル	大英図書館本『万国総界図』では■ナトカル
[77]	FAROUFARIYA	Barbarie/ バルバリア		ハルハリヤ	
[78]	AVASINIYA	Abyssinie/ アビシニア		カウマンテス	
[79]	YETSITOSI	Égypte/エジプト		エチツ	
[80]	Youfesiya			エヘシマ	
[81]	Seira	ville de Zeila/ ゼーラ市		セイラ	
[82]	Soukiya			ヌシナア	
[83]	LIFIYA INTERIOROU	Lybia interior/ 奥地リビア		リヒアインチリヨル	
[84]	KINEYA	Guinée/ギニア		キ子ヤ	
[85]	Bokore			バコレ	
[86]	MANTENKA	Mandingo		マンチンカ	
[87]	FARIBAROU			バウバル	
[88]	Merende	Melinda		メレンテ	
[89]	MASINA	Manna		マンナ	
[90]	Ankawa			アンカウ	
[91]	Kazaniba			カザニバ	
[92]	Kafouri	Caffres/ カフィール		カフリ	
[93]	Manikoko	Manicongo		マニココ	
[94]	Matero			マテロ	
[95]	Kafo te Fona Yesouperansia	Cap de Bonne- Espérance/ 喜望峰		カホチホハエスベウシ シヤ	

[78] AVASINIYAと記されている地域は、『万国総界図』では【カウマンテス】と記されている。「カ」を「ア」、「ウ」を「ワ」そして「マ」の第2画と「ン」を併せて「シ」と読み、「テ」の第1、2画を「ニ」と読み、「ス」を「ヤ」と読んだ結果、アワシニヤ=AVASINIYAの表記になったのであろう。

[82] Soukiyaは【ヌシナア】の「ヌ」を「ス」と読み、「シ」の第3画と「ナ」をつなぎあわせて「キ」と読み、「ア」を「ヤ」と誤読したものである。

[95] Kafo te Fona Yesouperansia【カホチホハエスベウシヤ】は喜望峰を意味するスペイン語のCap de Bonne-Espéranceの音訳である。

図19



図20



アメリカ

図21 北アメリカ

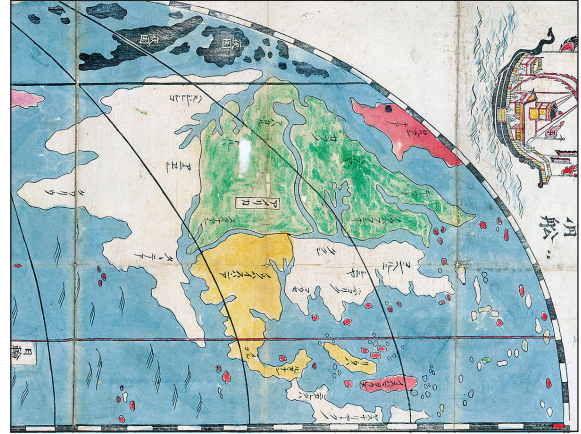


図22 南アメリカ

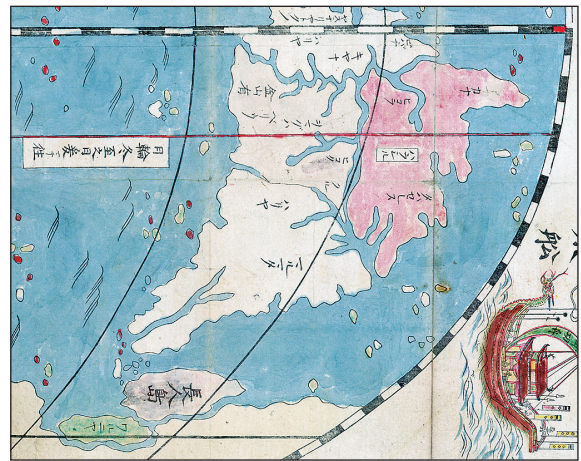


表4 地名比較 アメリカ

No.	クラブレポート			万国総界図	備考
	地図上の表記	地名比定①	地名比定②		
[96]	AMERIKA			アメリカ	
[97]	Ta ouriou	Kououriou	Quiuira	タウリウ	オルテリウス地図帳に Qvivira の地名が見られる
[98]	Aniyan	Aniyen	cap d' Anian/ アニアン岬	アニエン	
[99]	Ferouzi ressiko	Bergi regio/ Bergi 地方		ヘルジレシコ	
[100]	Toroufa			トルハ	
[101]	Afakarou			アハカル	
[102]	Karano			カラノ	
[103]	Korouranteya	Groenland/ グリーンランド		ロールランテア	ヨーロッパ側に示された部分は「コルランテア」と表記している
[104]	Noouba Fouransa	Nouvelle France/ 新フランス		ノウバフランサ	
[105]	Konferouni			コンヘルニ	
[106]	Siniya			シニヤ	
[107]	Fororita	Floride/ フロリダ		ホコリク	
[108]	Koouse	Komose	ville de Comos/ コモス市	コウセ	
[109]	Tafoun			タクン	
[110]	Noouba Isoufaniya	Nouvelle Espagne/ 新イスパニア		ノウハイスハニア	
[111]	Souketeya			スタチアン	
[112]	Tatotea	Totontec		タテア	
[113]	Messiko	Mexique/ メキシコ		メシコ	
[114]	Roukamen	Yeukatan/ ユカタン		ルカチン	
[115]	Nikrefoufa	Nicaragua/ ニカラグア		ニカレクハ	
[116]	Kasoutiriya Tofouno	Castilia del oro/ 金のカスティージャ		ヤスチリヤトクノ	
[117]	Khououfa	île de Cuba/ キューバ島		リウハ	
[118]	Isifaniora sima	celle[île] d' Hispaniola/ イスパニョーラ島	Haiti/ ハイチ	イスバマヨウレス	
[119]	Fariya	ville de Barias/ バリアス市		ハリヤ	
[120]	Kiyana	Guiane/ ギアナ		キヤナ	
[121]	Periou	Peru/ ペルー		ベリウ	
[122]	Omadafa	Ouratamba		ヲマグハ	
[123]	Fikori	Picora		ヒコリ	
[124]	Amakana	Amazones/ アマゾン		アマカナ	
[125]	FARASIROU	Brésil/ ブラジル		ハラシル	
[126]	Tafaseresou			タハセレス	
[127]	Fariya			ハリヤ	
[128]	Maroumata			マルマタ	
[129]	Tchhang jin tao ou Ile des Géants			長人島	*
[130]	Mewarouniya			ワルニヤ	*

[98]Aniyan【アニエン】はアジア北東部、あるいはアメリカ北西部に見られるアニアンという地名で、これはマルコ・ポーロ『東方見聞録』に由来する架空の地名である。『オルテリウスの地図帳』の「新世界(南北アメリカ)全図」では北アメリカ北西部にANIANとして、「タルタリアまたは大汗国図」にはアジア北東部にANIA、海峡部にSTRETTO DI ANIAN(アニアン海峡)の名前で登場する。

[99]Ferouzi ressiko【ヘルジレシコ】を、クラブロートはスペイン製の地図に見られるBergi regioとしているが、これは『オルテリウスの地図帳』にも見られる地名である。

[109]Tafounは【タクン】を「タフン」と誤読したものである。

[115]Nikrefoufaは【ニカレクハ】を「ニクレフハ」と誤読したものである。

[116]Kasoutiriya Tofounoは【ヤスチリヤトクノ】を「カスチリヤ トフノ」と誤読したものである。ただ、クラブロートはこれが金のカステイーリヤを意味するスペイン語のCastilia del oroであることを的確に指摘している。

[118]Isifaniora sima(説明書の方にはIsfaniora simaとある)は、イスパニョーラ島(ハイチ島)の音訳である。『万国総界図』には【イスバマヨウレス】の名前で出てくる。『万国総界図』を作成した際に利用したと考えられる『万国総図』系の地図にも「いすはまようれす」「イスハマヨウレス」などといった意味の通じない地名となっているが、これは元々カナで「イスパニヲラシマ」かかれていたものが「ス」→「マ」、「パ」→「バ」、「ヲ」→「ヨ」、「ス」→「マ」へと表記の変化が起きたものと考えられる。クラブロートはこの【イスバマヨウレス】の「パ」を「ハ」、「マ」を「ニ」、「ヨ」を「ヲ」、「ウ」を「ラ」、「レ」を「シ」、最後の「ス」を「マ」と読んで「イスハニヲラシマ Isifaniora sima」としている。これらのカナ表記は非常に紛らわしいため、クラブロートが読み誤ったのも無理はないが、この誤読はかえって正しい地名表記を導き出している。

図23



[122]Omadafaは【ヲマグハ】はマラニョン川沿いにあるOuratambaと比定されている。ペルーのイキトスIquitosの南でマラニョン川とウカヤリ川の合流点近くには「ヲマグハ」の発音に近いOmaguasという地域名が残っている。

[129]Tchhang jin tao ou Ile des Géants【長人島】は「長人島あるいは巨人の島」の意で、南米大陸最南端に配置されている。『オルテリウスの地図帳』においては南米大陸中のパタゴニア付近にPATAGONVM REGIO. voi incole sunt gigantesが配置されており、『坤輿万国全図』においても同じ位置に「巴太温 即長人国」と記されている。この長人の国が島として表現されているのは石川流宣によるアレンジである。

その他

紙面中央の上部にはDans les regions situées plus au nord, il fait jour depuis la 2e. lune jusqu'à la 8e., et nuit depuis la 8e. jusqu'à la 2de.と書いてあり、これは「より北に位置している地域では、二番目の月から八番目までは昼で、八番目から二番目までは夜である」という意味である。これは『万国総界図』に示された【此北之國略自二月至八月晝 自八月至二月夜⁹⁵】の仏訳である。同様に紙面中央の北回帰線のあたりにはQuand le soleil est arrivé au solstice d' été jusqu'ici, il retourne.すなわち「太陽は夏の(ママ)夏至にここまで上がって来た時、戻っていく」とありこれは【日輪夏至之日是マテ往】の仏訳、また南回帰線のあたりにQuand le soleil est arrivé au d'hiver jusqu'ici, il retourne.すなわち「太陽が冬にここまで上がってきた時、戻っていく」というのは【日輪冬至之日是マテ往】の仏訳である。

南方大陸メガラニカの突起したあたりにPeu de gens sont venus dans ces pays meridionaux, c'est pourquoi on n'a pas de connaissance des habitans et des productions.すなわち「これらの最も南の国々にはあまり人々は来たことがない。こういうわけで住民や産物についてはわからない」とあるのは【自是南方地人到者少故未審其人物如何⁹⁶】の仏訳である。原漢文のものではあるがかなり正確な訳がなされている。

以上、地図上の地名を見てきたが、『万国総界図』のカナや漢字は判読しがたいものが多い。例えば「カ」と「ア」、「ス」と「マ」、「リ」と「ク」と「ワ」と「ウ」、「マ」と「ニ」の違いなどである。こうした微妙なカナ表記があるため(写しを作成する際に誤写したか、あるいは判読の際に誤ったかは明らかでないが)、クラブロート図の中には相当数の「誤読(写)」がある。しかしその誤読がかえって正しい地名比定を行っている例も見られる。『万国総界図』でアフリカ大陸に見られる【カウマントス】という地名をアビシニアと比定していることや、カリブ海に浮かぶ【イスバマヨウレス】をイスパニヲラシマすなわちイスパニョール島(ハイチ島)に比定していることなどがその好例である。我々の目から見ても不明な地名の多い『万国総界図』であるが、クラブロートは日本語、中国語、スペイン語などの語学力、そしてヨーロッパ製の古地図を駆使して地名比定を行っている。繰り返しになるが、クラブロートはこの『万国総界図』を文字通り即物的に取り扱っている。これは18世紀半ば一未知であった北太平洋地域の地理情報を示すものとして戦略的に取り扱われてきた時代一とは大きく意味を異とするものである。

おわりに

18世紀半ば、ベーリング探検隊によってアジア東岸の海域の測量、そしてアジアからアメリカ大陸への到達がなされた。これらの探索を足がかりとして、後にアジア-アメリカ間の海峡の存在が実証されるようになる。しかしベーリングの報告書が世に出はじめた18世紀の半ばには、これに対して次の2点において疑問が提示された。すなわち(1)アジアとアメリカ大陸が、ベーリングの到達した地点よりはるか北方においてつながっているかもしれないということ、それから(2)カムチャツカと日本の位置関係である。これらはこれまで謎とされていたアジアとアメリカの関係、そして太平洋上に存在するとされてきた「ガマの陸地」の存否にかかわる重要な問題であった。そして同時にこの北太平洋海域の状態を的確に表している資料として注目されたのがケンペル『日本誌』であった。この著書において示された、日本人および東アジアに住む人々による談話やケンペルが日本で見たという世界図はアジア-アメリカ間に「蓋する」島、そして本州の東海上にあるガマの陸地の存在を示す情報として利用された。そしてケンペルの記述を補強する資料として用いられたのがほかならぬ『万国総界図』だった。これは部分図の形で広く紹介され、『日本誌』の「蝦夷島の奥地にある大きな韃靼の前方に、約15度東寄りに突出した陸地が日本の東岸として示されて」いるという記述を元にカムチャツカ半島が加えられている。この作業によりトマス・ジェフリズが「ロシア側の説明と一致している」と評しているように、この部分図はベーリング探検隊のもたらした報告と一致するものであり、信用に足る資料として利用された。

実は、ケンペル自身は、日本で得た情報および日本製世界図による北太平洋海域の情報に対して疑問視していた。しかしながら、18世紀の間、ケンペルの記述および『万国総界図』は原典批判されることなく受容されたのである。19世紀になると、クラブロートによってはじめて『万国総界図』の全体図に関する考察が行われ、そしてこの考察によって地名の原拠の多くが『オルテリウスの地図帳』によっていることが明らかにされた(なお、『万国総界図』の粉本の1つである『坤輿万国全図』は『オルテリウスの地図帳』をもとにつくられた)。またクラブロートはフットマンの協力を得て当時大英博物館に所蔵されていた『万国総界図』を調査、題名や出版年および彩色、地名表記の確認、そして『オルテリウスの地図帳』との校合など、まさに原典批判たる研究を行った。その結果、ガマの陸地と混同されてきた Kia-y-tao が、Hia I tao (蝦夷島のピンイン表記) すなわち蝦夷地のことであり、これは本来、本州の北に位置されるはずのものであると指摘された。クラブロートは『万国総界図』において2つの蝦夷地—「夷狄」と「蝦夷島」—が示されていることにはじめて気づき、そして後者が誤って配置されたものと結論付けた。無論、19世紀初めにラ・ペルーズやクックらの探検によって北太平洋海域の情報が明らかになっていたという時代背景もあるだろうが、それ以上にクラブロート自身の語学力、とくに漢字の解読能力そして原史料に基づいた原典批判によって「蝦夷島」の配置の矛盾を見抜くことができたのであろう。

上記にまとめたように、本稿ではヨーロッパにおける『万国総界図』の受容を中心に論じ、18世紀には『日本誌』が北太平洋海域の状態を示す資料として読まれたことを示すことができた。また、『万国総界図』はケンペルの記述を裏付ける資料として「発見」され、積極的に利用されてきたことを明らかにすることができた。従来『日本誌』がヨーロッパに与えた影響については多く論じられてきたが、ケンペルの持ち帰った資料の活用状況あるいはその影響に関しては実証的に論ぜられることはなかったようにおもわれる。『万国総界図』はケンペルの手からスローン卿に渡り、それから大英博物館（あるいは大英図書館）に所蔵されることになったが、この地図は決して死蔵されていたわけではなく、『日本誌』の記述を補足する重要な地理資料として閲覧に供され、利用されていた。今後、その他のケンペルコレクションの利用状況に関する調査が俟たれる。

翻訳 クラプロート「ロンドンの大英博物館に保存されている日本製の世界図に関する略述」

※（ ）は原注

この世界図の原本は有名な旅行者、エンゲルベルト・ケンペルによってヨーロッパにもたらされた。そして、他の手稿類とともにハンス・スローンによって購入され、後に大英博物館に寄託された。ドギーニュ Deguignes 神父はそれに関する「中国人によるアメリカ海岸の航海に関する研究 *Recherches sur les navigations des Chinois du côté de Amérique*」という短い記事を発表した⁽¹⁾。この世界図は、縦3フィート1/2インチと横1フィート9インチの幅がある。私が手元に持っていたコピーには題名が無く、また原本にはタイトルがあるかどうか知らない。というのも、私はロンドンに滞在中、ケンペルの手稿を調べることができなかつたし、またいくつかの断片から予知するしかなかったからだ。同じ理由で、私はこの興味深い作品の出版年が示されているかどうかを知らない。しかしそれは1644年と、ケンペルが日本を出発した1692年の間に作成されたはずだ。というのは、1644年になってやっと中国が清太 *Tai thsing*⁹⁷ と呼ばれるようになったからだ。

作者がヨーロッパの地図を使ったことは、明らかである。それは主にこの名前をもらった *Terra australis* に与えた形状から理解することができる。これはまた、その情報源が比較的古かったことを示している。なぜなら新オランダ *Nouvelle-Hollande* がこの想像上の大地とまだ分離されていないからである。この地図の名前の一部は漢字で書かれるが、大部分がカタカナ *Kata-Kana* という日本の音節文字で書かれている。

世界図の中央では日本の東端に触れる線が垂直に交差している。北には北を意味する漢字の *pe*⁹⁸ があり、南には *nan*⁹⁹ すなわち南がある。赤道は非常に横長く、また地図の周辺も白、黒交互に細分された線が引かれている。これらの区分線は非常に不正確なので、それらを再現するにあたって縮図としては判断できない。

世界の四つの部分は、異なる色によって分けられる。ヨーロッパは緑、アジアは黄色、アフリカは赤、アメリカは茶色で示される。北部にはいくつかの黒い島が見られ、その中でもより大きい4島には白文字の漢字で *Ye koue* あるいは夜の王国（日本語ではよのくに *Yo no kouni*）と書かれている。

赤道には名前が付いていない。

カムチャツカ *Kamtchatka* の東側の北極圏の部分に中国語で、以下のメモが記されている。「より北に位置する地域は2番目と8番目の月まで昼で、8番日から2番目の月までが夜である。」

北回帰線に、中国語で同様なことが読める。「夏至の時に太陽はここまで到達して、戻っていく。」

南回帰線に、中国語でこう記してある。「冬至の時に太陽はここまで到達して、戻っていく。」

Terra australis の北端に中国語で以下のメモが書いてある。「それより南にある国々に到達したものはわずかであ

る。こういうわけでそれらの国の住民や産物に関する知識は無い。」

同じTerra australisのインド南方にTan ma lieという名前が見られる。これらはBeach、LucachとMaleturの名前でオルテリウスの地図帳(1570)に配置されている、最後の単語の最初の2つの音節ma lieあるいはma lyをつなげたものだと解釈したい。

Terra australisおよびアメリカ最南端の間に2つの大きい島があり、その北側の方には中国語でTchhang jin tao、あるいは巨人の島と書いてある。南部はMewarouniyaと呼ばれるが、これはマゼランの国Pays de Magellanという意味である。

(1) Mémoires de littérature de l'Académie Royale Inscriptions et Belles-Lettres, vol.xxviii, pag.503

アジア

Jy penまたはNiphonは、それに所属する全ての島々を含める日本である。

中国語でTchhang men、日本語でNangataは大きい島Niphonの最も西端の州である。その名前は大きいドアを意味する。

中国語でKieou koue、それはKiou siouという大きな島、または九つの州である。

中国語でTa feou(これは写しに見られるものである)というのは、おそらく漢字で書かれたAmakousaの名称であるThian thsao(天の草)の間違いであると思われる。

中国語でPa tchang、日本語でFa tsioは、追放の場所として使用される日本の南の島である。

中国語でHia i tao、つまりエビを持つ野蛮人の島は、日本語ではエゾIesoという。私達の地図では日本の北方ではなく、誤って東方に示してある有名なエゾ地である。ドギーニュ神父は、この島の名前を誤読した。彼は、それをKia y taoと表記し、さらにガマの陸地Terre de J. de Gamaとされるものと混同している。というのも、日本の地図ではそれは北ではなく、東に配置されているからである。

中国語でA lan kiai、つまりAlanの境界は、この地図では東シベリアを表している。北アジアの東方で、中国語でTha ta koueすなわちタタールの国(Pays des Tatars)という意味をあらわす。それはゴビ砂漠の北側に位置されている。そして中国語で以下のことが記されている。「この海には10日分の幅(広さ)がある。これはCha mo(あるいは砂の砂漠)と呼ばれる」

Tai thsing koueあるいはTai thsing帝国は、中国である。属州についてはKouang toungeとYun nanのみが示される。中国の場合は全ての国名がこの国の文字で記される。

中国語でTchhao sian koueは、Tchhao sian¹⁰⁰ 王国、つまりCoréeのことである。

中国語でTai wan taoつまりTai wan島はFormose¹⁰¹のことである。

この島の東にThai Thing haiつまり中国の海と記してあるのが見られる。

その南端の部分には2つの島があり、一方はSan thoung tao、もう一方はNiu taoつまり女性の島である。Lo lie kouは後者の東側の部分のことである。

中国の南側にはThiao Tehhouan、Thsuan ly、そしてNgan nanという島がある。

Toung kingはトンキンTonquin王国のことで、正確にはNgan nanという。作者は、そのためこの国の名前を2回、地図上に記入した。

Toung kingの西はKianとTchen tchhingそしてTun kingと名付けられた国がある。この名前はおそらくトンキンTonquinが3通りの方法で呼ばれるということを示している。Tun kingの南はKiao tchiすなわちコーチシナである。

Han phou seというのはカンボジアの中国語あるいは日本語による表記である。

Ta khoua waというのは古い地図に見える大ジャワ *grande Java* のことである。

Siuan loというのはシャムの中国名である——以上全ての名前は中国語で書かれているが、私が特にことわらない限り、以下のものはカタカナで示している。

前の3つの国の東には非常に多くの島々が見られる。それらは次のような名前を持つ。Farakoani、Chimatara (スマトラ *Sumatra*)、Ante (エンデ *Ende*)、Rousano (ルソン *Luçon*)、Fouroumeri、Makachirou (マカッサル *Macassar*)、Menatora、Fanta (バンダ *Banda*)、Seiran (セイロン *Ceran*)。最後のものは *nouvelle Guinée* (名前は記されていない) の近くにある。

これらの島々と *Toung king* の間には、中国名の名前を持っている2つの島がある。Ti mo あるいはティモール *Timour* と、バンダ島 *l'île de Banda* のようである *Pa na tao* である。

インド半島、ガンジス川周辺は中国語で *Siao thian tchu* と名付けられており、その南端には次の国々が漢字で記されている。Ho li cha、Ye li pou そして Ma la kia である。

この最後のものは間違いなくマラッカ *Malacca* の事で、これはインドの別の半島である。マラッカとオーストラリア大陸 *Terra Australis* の間には *Sou meng tha la* つまりスマトラ島があるが、我々が既に見たインド群島のなかに、日本語で *Chimatara* の名がある。

アジアの西部には4つだけ国名が記される。Toruko すなわちトルコ、Siouriya すなわちシリア、Arafiya すなわちアラビア、Ferousiya すなわちペルシャである。

西アジアの中部 *Ho teng* (この中国語は河が登ることを意味する) は、黄河 *Houang ho* の源流であることを大げさに示したもののだが、単に中央アジアの *Khoten*¹⁰² という都市あるいは地域名を記しただけということもあり得る。

ヨーロッパ

フランスはこの地図の中では *Yeouropa* つまりヨーロッパの名で出てくるが、最も大きく、そして重要な部分は *Houng mao* あるいは赤い髪で、これはこの地図が作成された当時、ヨーロッパで最も強大な国として日本人に知られているオランダ人である。

Yeouropa あるいはフランスの南には *Isfania* つまりスペイン、*Kasoutera* つまりカステールヤ、*Itariya* つまりイタリアがある。——ヨーロッパの北端の部分は *Manatokarou* である。北にはイングランドである *Inkeresi* とアイルランドである *Inferounia* (イベルニア *Hibernia*) がある。

イングランドの北には *Ysourandiya* すなわちアイスランド、そしてその西に *Souesiya* すなわちスウェーデンそして *Noberoutsia* すなわちノルウェーがある。

ヨーロッパと赤い髪の間には *Seroumaniya* つまりドイツと、*Aroufania* つまりアルバニアがある。そして後者の南には、これとイタリアの *Fenesa* つまりヴェニス の間に *Romaniya* もしくはヨーロッパのトルコ *Turquie d'Europe* がある。

赤い髪の南東には *Foronitsou* もしくはポーランドがある。

スウェーデンとノルウェーの東には *Finma* すなわちフィンマルク *Finmarc* があり、そしてこの島の南には *Kontofouria* と名づけられた大きい国が見られるが、これはヨーロッパのロシアをあらわす。なぜなら、それはタタールの国と国境を接しているからである。

Kontofouria と夜の国 *pays de la Nuit* の西部の間には2つの島がある。西にあるのは *Siao jin tao* つまり小人の島で、もう一つは *Fiwafia* であるが、私の手持ちのコピーでは大変読みづらく、あるいは *Fiasia*、もしくは *Siwafia* と読めるかもしれない。

アフリカ

アフリカ *Afrika* という名前は世界の中ほどに見られる。

アフリカ北部、西地域の東側には *Marokan*、つまり、モロッコ帝国が見られ、またその中には2つの州すなわち南に *Akatsisou* (オルテリウスの地図の *Auzichi* かもしれない)、北に *Natokarou* がある。それから *Faroufaria* あるいはバルバリア *Barbarie* がある。この南東には *Aawasiniya* すなわちアビシニア *Abyssinie* があり、この国の北東には *Etsitosi* すなわちエジプトがある。

アビシニアとアラビアの間、そしてエジプトの南には *Youfesiya* と名付けられた地域がある。そしてその北およびアラビア湾の入口には *Seira* があり、これは古い地図で *Zeila* 市と記される。

バルバリア *Barbarie* の南には *Soukiya* と *Rifiya interior* すなわち奥地リビア *Lybia interior* があり、この地名はあるラテン語の地図から引用されたものにちがいない。

アフリカ中部ではまず、西側に *Kineya* あるいはギニアが見られ、ギニアの北には *Bokore*、そして西¹⁰³にはマンデインゴという国である *Mantenka*、それから *Faribarou* がある。

アフリカ東部の海岸地帯には *Merende* あるいは *Melinda* と *Masina* あるいは *Manna* が、この最後の国¹⁰⁴の南側にある。

西側の海岸には *Ankawa* と *Kazaniba* が見られる。

さらに南には大きな *Kafouri* 国すなわちカフィール *Caffres* があり、この西海岸には *Manikoko* すなわち古地図に見える *Manicongo* である。東には *Matero* がある。

アフリカの南端はわれわれの地図では *Kafo te fona superanisia* すなわち *Cap de Bonne-Espérance* と呼ばれている。

マダガスカル島は明確に示されているが、少なくとも私蔵の写しでは名前が欠けている。

アメリカ

アメリカの名前は世界の北部の中央に置かれている。

アジアの東端と向かい合うのは *Tauriou* と呼ばれる突出した岬だが、これはおそらく *Kououriou* の間違いだと思われる。これは古地図の *Quiuir* だろう。

Aniyen (隣接する縮図に間違っ て載せられた *Aniyan* ではない) という名前は、北東アジアに面した海岸には見られないが、国の内部すなわちカリフォルニア湾の北端に注ぐ大きな川の源流の上にその名が見られる。この名前はわれわれの古い地図の *Anian* という岬をあらわしている。

Aniyen の北、そして氷海の端にあるのは *Ferouzi resiko* で、これはスペインなどの地図にあらわれる *Bergi regio* である。さらに西には、*Toroufa*、*Afaka...*、*Karano* など私が説明しきれない地名がある。

Korourantea という島はグリーンランド、*Nova Fouransa* は新フランス *Nouvelle France* だが、前二者¹⁰⁵の南にある *Kouferouni* と *Siniya* にどの国名が隠されているのか、私は知らない。*Fokorita* はフロリダをよく表しており、一方 *Koouse* は古い地図で *Comos* 市 *la ville de Comos* としてあらわれる *Komose* の間違いのようである。フロリダの北には *Tafoun* があるが、私はこれを説明することができない。*Nooufa Isfania* は新イスパニア *Nouvelle Espagne* のことである。私は *Souketea* は分からないが、*Tatotea* は間違いなくカリフォルニア北端部にある *Totontec* の古い州であろう。

Mesiko はメキシコ、*Roukaton* はユカタンの間違いである。

Nikarekoufa はニカラグアをよくあらわしているが、*Kasteria dofouno* が *Castilia del oro* であると気づくのは難しい

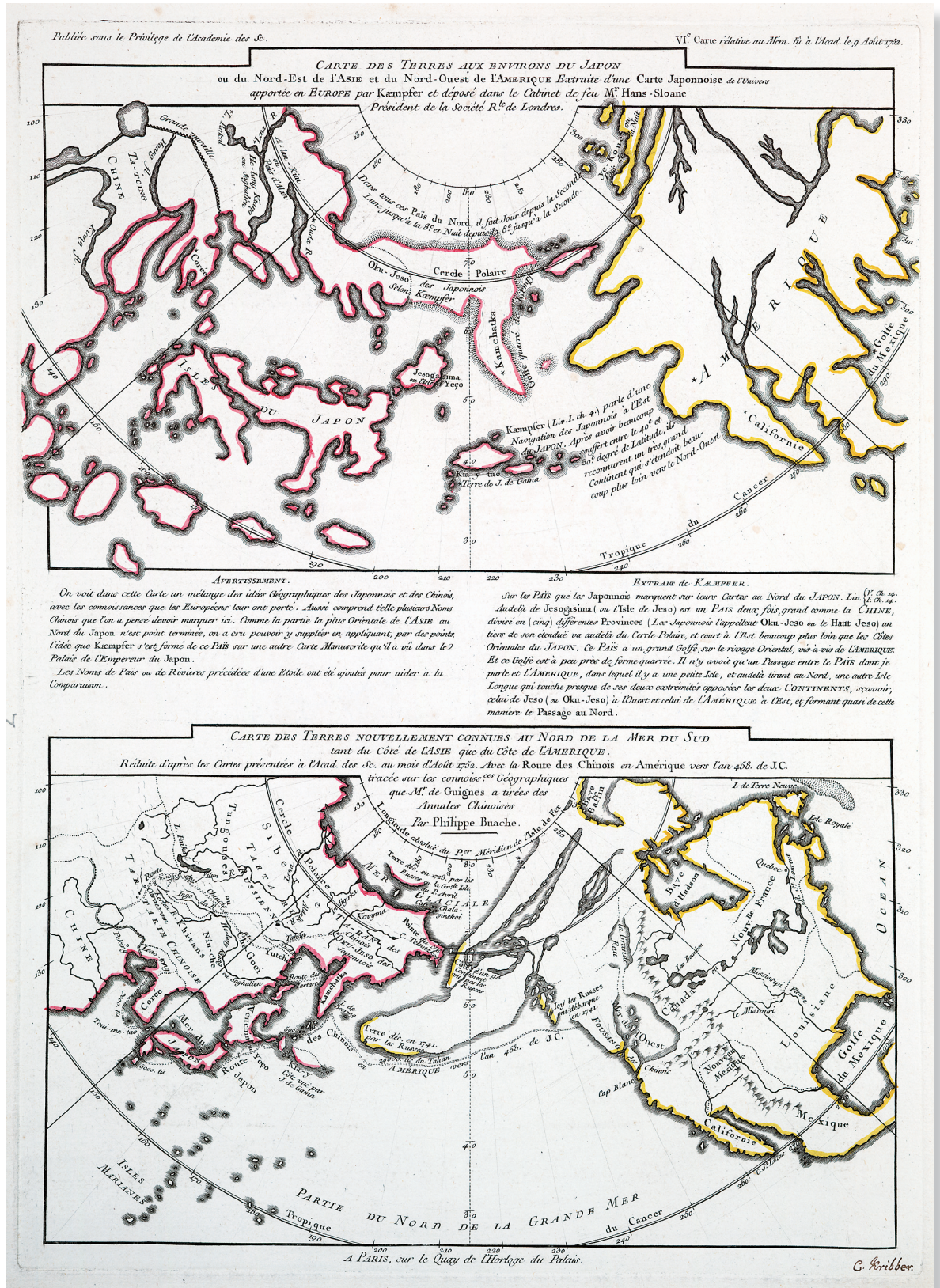
であろう。キューバ島はFououba(発音はKhououba)そしてHispaniola島あるいはHaitiをIsfaniora simaとしている。simaという語は島を意味する。

赤道の南にはFariaがあるが、北の緯度で、もっと東にある都市と湾であるPariaを表しているはずはない。これはむしろ、いくつかの古地図でペルーの北端に示されているバリアス市la ville de Bariasのことであろう。Kiyanaとされているギアナ、Periouとされているペルーに気付かないことはないであろうが、OmadafaがMaragnonの上にあるOuratambaであるということ、それからAmakanaがアマゾンであることを見つけるのはより難しい。

Fikoriは古地図に見えるPicoraをあらわし、Farasirouはブラジルを示す。

アメリカ南端に見られる、Tafaseresou、Fariya、Maroumatouという名前の解釈は他人に任せなければならない。

図25 ビアシェ「日本あるいはアジアの北東とアメリカの北西の陸地の抄出」(上)と「アジアの沿岸とアメリカの沿岸を加えた、南海北部の陸地について最近知られた地図」(下)



上図にはそれぞれ以下の説明書が附されている。

緒言 AVERTISSEMENT (上図左)

ヨーロッパ人がもたらしたものととも、日本人と中国人の地理的な知識の混合が見られる。また、中国人がここに記したと考えられる中国語の名前をいくつか理解することができる。日本の北のより東のアジアの部分は、完全には書き終わっていないので、ケンペルが日本帝国の王宮(筆者注:江戸)で見た、別の手書き地図に基づいてこの地方を形作るという着想を適用することによってその地方を補うことができると思われる。

星(筆者注:*マークのこと)を前に置いた国や川の名前は、比較対照の助けとして加えた。

ケンペルの抄出 EXTRAIT de KAEMPFER (上図右)

日本人が彼らの地図の、日本の北部に記した国々に関して(5巻14章、1巻14章(ママ))。エゾガシマ(あるいはエゾの島)は中国の2倍の大きさで、(5つの)様々な地域に分けられる(日本人はそれをオクエゾ Oku-Jeso あるいは高エゾ Haut-Jeso と呼ぶ)。その3分の1は北極円と日本からはるかに東岸の、東の空き地の向こうまで広がっている。そしてこの国には大きな湾が、東岸に、アメリカと対面に存在している。そしてこの湾はほぼ正方形に近い。私が話した国とアメリカの間には1つしか航路は無く、そこには小さな島、そして北に描いてある、2つの大陸の2つの逆側の端の他の長い島とエゾ(あるいはオクエゾ Oku-Jeso)の西とアメリカの東に、ほぼこのように北の航路がある。

[図26和訳]

クラブロート氏はちょうど『アジアに関する紀要』第3巻を出版したばかりだ。重要な文書の中に、かの有名な旅行者ケンペルによってもたらされ、他の文献コレクションや手稿類といっしょにロンドンの大英博物館に保存されている日本製世界図に関するコメントが含まれている。クラブロートはバーチ Birch 氏によっておよそ70年前にフランスに贈られた地図の写しに基づいてこのノートを書いた。この写しには地図原本の題目も出版の日付も記されていないし、また原本とは異なる彩色が施してある。クラブロートはロンドンアジア協会 Société asiatique de Londres の事務局長であるフットマン W. Huttman 氏にこれらの相違点を解明するために連絡をとった。この高評されながらもたいへん謙虚な科学者は、人文系の世界の知識人に日本人や中国人に関する研究の情報を提供することを中断し、先の10月31日の手紙で彼に次の細かい説明を提供してあげた。「その世界図のタイトルは萬國総界圖(中国語では Wan koue thsoung kiai thou)すなわち全ての国と全世界の地図です。その地図には江戸(Yedo)、貞享(中国語で Tching hiang、日本語では Ty kio)5年と名付けられた年号すなわち1688年が記されています。彩色はあなたがお持ちしている写しとはだいぶ違いますよ、と Huttman 氏は追加した。世界の各部分に同じ色を塗らずに、様々な細分された地域に、それぞれ異なる色が塗られている。たとえば日本は薄い黄色、中国は黄色、朝鮮は薄い赤、タートルは緑、そしてインドは白です。」

図26 『アジアに関する紀要』書評

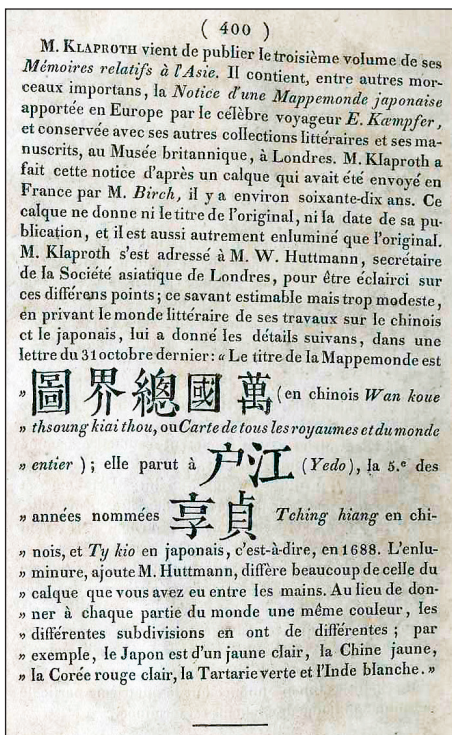


図27 クラプロート「Mappemonde Japonaise」



『万国総界図』をほぼ正確に写し取ったもの。「四国」と「淡路」を省略し、またアジア北東部の海岸線が途中で消えている。北アメリカ大陸東岸部も途中で消えている部分がある。

表5 関係年表

西暦	和暦	事項
1651	慶安4	ケンペルが生れる。
1675	延宝3	島谷市左衛門らによる小笠原島探索が行われる。
1687	貞享4	石川流宣『本朝図鑑綱目』初版発行。
1688	貞享5=元禄元	同『万国総界図』初版発行。
1690	元禄3	ケンペル長崎着船。
1692	元禄5	8月ケンペル出国。
1712	正徳2	『廻国奇観』をレムゴーで出版する。
1716	享保元	11月2日、ケンペル65歳で死去。
1723	享保8	ハンス・スローン卿がケンペルの遺産を購入1度目。
1725	享保10	スローン卿がケンペルの遺産を購入2度目。 この年よりベアリング第1次探検行われる。
1727	享保12	ケンペル著『日本誌』英語版出版。(シヨイヒツァーによる英訳)
1729	享保14	『日本誌』蘭・仏語版なる。
1731	享保16	『日本誌』英語版重版。
1733	享保18	『日本誌』蘭語版再版。この年よりベアリングの第2次探検行われる。
1747	延享4	『学士院紀要』所載のアーサー・ドップズの手紙で日本製の世界図が故スローン卿の博物館に所蔵されていることが報じられる。
1749	寛延2	仏語版『日本誌』より一部独訳(デュアルド『中国帝国誌』) 『ジェントルマンズマガジン』にドップズの手紙の抄出が掲載される。
1752	宝暦2	ロイヤルアカデミーにてフィリップ・ブアシェが『万国総界図』写しの全体図を公開する。 (これより以前にスローン卿からドギーニュに『万国総界図』の写しが贈られる) ジョゼフ・ドギーニュが「中国人によるアメリカ海岸の航海に関する研究」の報告を行う。
1753	宝暦3	ブアシェ『俗に南海と言われる大海の北部の新発見に関する地理学のおよび物理学的考察』発行。 はじめて『万国総界図』の部分図が版行される。 この年、スローン卿死去。博物館法制定により大英博物館成立(開館は1759)。
1761	宝暦11	トマス・ジェフリズによりミュラー『アジアからアメリカへの航海』の英訳本が版行。 『万国総界図』の縮図(ブアシェ図の英訳)が掲載。
1762-72	宝暦12-安永元	フランス『百科全書』図版編出版。ブアシェによる縮図が引用される。
1777-9	安永6-8	ウィルヘルム・ドームが『日本誌』独語版を出版。
1828	文政11	クラブロート『アジアに関する紀要』第二巻版行。『万国総界図』の全体図を掲載。 『アジア雑誌』において『アジアに関する紀要』の書評が掲載。 フットマンにより大英博物館所蔵『万国総界図』の書誌情報が提示される。

表6 シヨイヒツァーリスト/ケンペルコレクション地理・地誌関係書目

	シヨイヒツァーリスト	抄訳	現存書目
1	Dodsutski. Several Road-books for the use of Travellers, giving an account of places, the prices of Victuals, and Carriage, and the like, with many figures of the Buildings, and other remarkable things to be seen on the Road.	道中記	『江戸道中記』 『今極道中付』 『今極道中鑑』
2	A map of the whole world, according to the Japanese. It is two Feet broad, and four Feet three Inches long.	日本人による 世界図	
3	Several Maps of the Empire of Japan, of two Feet, three Inches in breadths, and six Feet and a half on length.	日本帝国の地図	『本朝図鑑綱目』 『新選大日本図鑑』 『日本国大絵図』 『新版日本国大絵図』
4	A Map of the Empire of China, divided into its several Provinces of four feet in length and as many in breadth.	中国帝国の地図	
5	A ground-plot of Jedo, the Capital City and Residence of the secular Emperor, of four Feet and a half in length, and as many in breadth, contracted in Tab. XXX of this History.	江戸大絵図※	『江戸御大絵図』
6	A ground-plot of Miaco, the Residence of the Ecclesiastical Hereditary Monarch, five Feet and a half long, and four Feet broad, contracted in Tab. XXVII of this History.	京大絵図	『新選増補京大絵図』
7	A Map of the Town of Nagasaki, and the neighbouring Country, four Feet eleven Inches long, and two Feet two Inches broad, contracted in Tab. XIX.	長崎の街絵図	『長崎絵図』
8	A Ground-plot of the Town of Osacca, of three Feet in length, and two Feet eight Inches in breadth.	大坂大絵図	『増補大坂図』
9	A particular Map of the Road from Nagasaki to Osacca, with the representations of the Rivers, Bridges, Towns, Castles, Temples, &c. in a Roll, twenty Feet long, and eleven Inches broad.	長崎～大坂道中の地図	『諸国海陸安見絵図』
10	Another Map of the Road from Osacca to Jedo after the same manner, and of the same length and breadth.	大坂～江戸道中の地図	『同上』

※ケンペル旧蔵本『増補江戸図』も現存しているが、これは49cm×70cmの小型版である。

表7 図版出典一覧

図版番号	資料名	所蔵先	架蔵番号	引用書目/URL
5, 6, 10~24	『万国総界図』(貞享5年初版本)	大英図書館マップ ルーム	Map Collections ; Maps 920.(121.)	九州大学デジタルアーカイブ http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/bankoku/
2, 3	ケンペル手稿 Sloane3060	大英博物館		Michel/ Terwiel 2001 1/1. p621, p741
4	『本朝図鑑綱目』	大英図書館	Or. 75. f. 11	—
7	ケンペル『日本誌』(1727年英語初版本)	ヴォルフガング・ミヒエ ル氏	—	九州大学デジタルアーカイブ http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/kaempfer/eng9.html
5	ケンペル『日本誌』(1729年フランス語版)	九州大学附属図書 館医学部分館	D/K 11/v.1/1729	—
6	『万国総界図』(宝永5年本)	九州大学附属図書 館支子文庫	290-ハ-1/1	—
8, 25	フィリップ・ブアシェ「日本あるいはアジアの北東 とアメリカの北西の陸地の抄出」「アジアの沿 岸とアメリカの沿岸を加えた、南海北部の陸地 について最近知られた地図」	ゲッチンゲン大学	—	Göttinger Digitalisierungszentrums (http://www.gdz-cms.de/)
9	トマス・ジェフリズ「アジア北東部およびアメリカ 北西部の地図」	—	—	"Voyages from Asia to America", 1967
6, 10~18, 21, 22	ユリウス・ハインリッヒ・クラプロート「日本製の世 界図」	京都大学附属図書 館	A/k/3/(3)	"Mémoires relatifs a l'Asie", tome 3, 1828
26	『アジア雑誌』400頁	九州大学附属図書 館文系合同図書室	東史/50E/2	"Nouveau Journal Asiatique", tome 2, 1828

〔注〕

- ¹ Kaempfer, Engelbert: Werk, 1/1; 1/2 Heutiges Japan herausgegeben von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, Iudicium Verlag, München2001.を参照。以下Michel/ Terwiel 2001 1/1, 1/2とする。Michel/ Terwiel 2001 1/1は『日本誌』原稿であるケンペル手稿『今日の日本Hutiges Japan』を翻刻したもので、Michel/ Terwiel 2001 1/2はその解説および脚注を附したものである。
- ² Kaempfer Engelbert: The History of Japan, giving an Account of the ancient and present State and Government of that Empire; of Its Temples, Palaces, Castles and other Buildings; of its Metals, Minerals, Trees, Plants, Animals, Birds and Fishes; of The Chronology and Succession of the Emperors, Ecclesiastical and Secular; of The Original Descent, Religions, Customs, and Manufactures of the Natives, and of thier Trade and Commerce with the Dutch and Chinese. Together with a Description of the Kingdom of Siam. translated by J. G. Scheuchzer, London, 1727. 以下英語版1727と記す。1727年版については国際日本文化研究センター所蔵貴重書データベース<http://shinku.nichibun.ac.jp/kichosho/>を利用した。なお更生閣1929やGlasgow1906の復刻版がある。
- ³ Nouveau Journal Asiatique, tome2 Paris, 1828. p400. 以下N.J.A.1828と表記する。
- ⁴ Gardner, Kenneth B.: Engelbert Kaempfer's Japanese Library. In "Asia Major", Vol VII. Nos. 1/2, 1959. および沼田次郎「ケンペル蒐集の日本書籍について」(『蘭学資料研究会研究報告』225号、1972)を参照。ガードナー氏の詳細な目録は後に1993年に『Descriptive catalogue of Japanese books in the British Library printed before 1700/Kenneth B. Gardner = 大英図書館蔵日本古版本目録 / ケネス B. ガードナー編』として出版されている。
- ⁵ 現在ケンペルコレクションは大英博物館日本部、英国自然史博物館、人類学博物館(大英博物館の一部)、大英図書館に分割して所蔵されている。調査の経緯については川瀬一馬編『大英図書館所蔵 和漢書總目録』(講談社1996)およびユーイン・ブラウン「大英図書館所蔵ケンペル将来日本資料の意義」(『ケンペル展』、国立民族学博物館1991)を参照した。
- ⁶ なお、大英図書館の目録では出版年代を1850?としている。

⁷ ブラウン1991

⁸ Kapitza, Peter: Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung. Iudicium Verlag, München, 2001を参照。大島明秀氏(九州大学比較社会文化学府)の御教示による。

⁹ Kaempfer, Engelbert: Histoire naturelle, civile, et ecclésiastique de l'Empire du Japon: Composée en Allemand Par Engelbert Kaempfer, Docteur en Médecine à Lemgow; & traduite en François sur la Version Angloise de Jean-Gaspar Scheuchzer, Membre de la Société Roiale, & du Collège des Médecins, à Londres. Ouvrage enrichi de quantité de Figures dessinées d'après le naturel par l'Auteur même. A la Haye, Chez P. Gosse & J. Neaulme, MDCCXXIX. 1729. 本稿においては九州大学附属図書館医学部分館所蔵本(D/K 11/v.1/1729)を用いた。以下仏語版1729と記す。

¹⁰ 本稿で蘭語版を参照する際には雄松堂出版による1733年版を用いた(“De beschryving van Japan…”, 雄松堂出版2000)。なお、鳥井氏によると蘭語1729版と1733版に大きな差はないという。鳥井裕美子「ケンペルから志筑へー日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容」(『季刊 日本思想史』47号、1996)を参照。

¹¹ Halde, Johann Baptista du: Ausführliche Beschreibung des Chinesischen Reichs und der grossen Tartarey. 4 vols. Rostok: Johann Christian Koppe, 1747-1749.

¹² 『日本誌』の出版状況に関してはデレク・マサレラ『『日本誌』史』(『遙かなる目的地』、大阪大学出版会1999)を参照。ドーム版は今井正による訳『[新版]改訂・増補 日本誌』(霞ヶ関出版2001)が出ている。本稿は『日本誌』英語版1727、仏語版1729、蘭語版1733を参照し、特に異同が無い場合は英語版1727から訳出している。英語版、仏語版、蘭語版には訳者ショイヒツァーの見解が混入しており、また誤刻なども見られるが、本稿でケンペル手稿『今日の日本』を底本としなかったのには理由がある。本稿はショイヒツァーによる英訳版から派生した『日本誌』の読まれ方すなわち受容史という観点から叙述しているからである。特に5章で詳述するようにフィリップ・ブアシェ(彼はケンペルが持ち帰った『万国総界図』を学会および論文、著作においてヨーロッパに広く紹介した)は『日本誌』仏語版からケンペルが記した北太平洋海域の地理情報に関する記述を抄出し、これを積極的かつ戦略的に利用した。

¹³ 英語版1727, p66

¹⁴ 以下、現在の地域名として北海道本島をあらわす際には「蝦夷地」とする。ただし、史料中の訳語についてはJeso, Jesso, Jezo, Iezoなどの表記についてはすべて「エゾ」と記し、Jesogasimaについては「エゾガシマ」と記した。

¹⁵ これはオルテリウスの地図帳(1570)などに現れるアニアン海峡のことである。アニアン海峡はアジア北東部と北アメリカ大陸北西部の間にある架空の海峡のことで、18世紀のベーリング探検以前にはその存在について不明とされてきた(詳しくは後述)。

¹⁶ 英語版1727, p65-66

¹⁷ 大英図書館所蔵スローン文書Sloane. 2910。ヴォルフガング・ミヒェル氏(九州大学言語文化研究院)の御教示による。

¹⁸ フリースの航海については秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』(北海道大学図書刊行会1999)を参照した。

¹⁹ 以下三条は英語版1727の1巻4章、p67-68より要約。

²⁰ 「福山秘府」貞享4年6月1日条(『新撰北海道史』第5巻、1936に翻刻)

²¹ 嶋谷市左衛門らは「唐船造御船(ジャンク船)」に乗船し、延宝3(1675)年閏4月5日に下田を出航、同7日には八丈島に到着。そこから南東へ向かったが、天候が悪くなり、針路を北西に変えた。そこからまた東南東、それから西、東…と度々針路を変えつつ航海し、5月29日には本島(父島)を発見した。本島(父島)、沖島(母島)の両島には社を建てその中に書付が残された。秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料・地図について」(『海事史研究』創刊号1963、3・4合併号1965、9号1967)を参照。報告書は延宝3年6月19日嶋谷らの江戸帰還後すぐに幕府に届けられたであろうが、9年後の貞享元(1684)年に何らかの理由で長崎奉行にも提出されている。

²² 英語版1727, p68

²³ ケンペル手稿ではKabersari, orankai, Sit Sij, Ferisan, Amarisiとなっている。

(Michel/ Terwiel 2001, 1/1, p55)

²⁴ 『日本古地図大成 世界図編』(講談社 1975)所収の『万国総図』特に神戸市博物館蔵本を参照した。

²⁵ 英語版1727, p68

²⁶ 英語版1727, p590

²⁷ Michel/ Terwiel 2001, 1/1, p621

²⁸ Michel/ Terwiel 2001, 1/1, p741

²⁹ Michel/ Terwiel 2001, 1/2, p750。ミヒェル氏の御教示による。

³⁰ 史料に関しては宮崎克則氏(九州大学総合研究博物館)の御教示による。

なお、九州大学デジタルアーカイブ「万国人物図・万国総界図」<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/bankoku/>において高精細画像が閲覧できる。

³¹ 『万国総界図』の粉本である『万国総図』が元々掛軸表装されることが想定されていたため、縦長の形態になったと考えられる。海野一隆「資格証明としての地図」(同『ちずのしわ』、雄松堂出版1985)を参照。

³² 以下、『坤輿万国全図』と称する時は宮城県立図書館所蔵の版本を用いる。画像については<http://eichi.library.pref.miyagi.jp/konyo/>を参照した。

³³ 『万国総図』は木版本や手写本の形で現存している。作者は長崎において蘭医ガスパルから測量術を学んだ小林謙貞で、弟子の測量術修得完了の証明書として使われた白地図であったとされている。海野一隆「正保刊『万国総図』の成立と流布」(同『東西地図文化交渉史』、清文堂2003)を参照。また近年、流宣が『万国総界図』を作成するにあたり用いた原図として『方輿勝略』『輿図備考』『明清閩記』などが指摘されている。青山宏夫「万国総界図の系譜と「越中後」」(同『前近代地図の空間と知』校倉書房2007所収)参照。

³⁴ 『万国総図』は主にマテオ・リッチの『坤輿万国全図』(版本)に依拠しているものの、日本において作成された『坤輿万国全図』の写本や『万国総図』においては、原図には見られない「金島」「銀島」を日本の東方海中に配置する。これはマルコ・ポーロ『東方見聞録』以来の金銀島伝説に由来するものと思われる。この金島、銀島は、日本が紙面中央に移動することによって、日本の北方海上に位置する事となったのである。なお、すでに17世紀はじめにドン・ロドリゴによって日本に金銀島伝説がもたらされていた。

³⁵ 海野一隆「辺境図の変遷」(『日本古地図大成 本編』、講談社1972)

³⁶ 原色複製は『日本古地図大成 本編』、『地図出版の四百年』(ナカニシヤ出版2007)にある。

³⁷ なお、1729年の仏語版、1733年の蘭語版にも記されている。

³⁸ 地図の法量に関する問題については海野一隆「ちずのしわ」(『ちずのしわ』所収)に詳しい。

³⁹ なお今井氏はドーム版における記述を「御座船」と訳している。

⁴⁰ 英語版1727, p409。なお英訳第2版1728と仏訳版1729および蘭訳版1733にも全く同じ記述が見られるが、レムゴーに残されていた別のケンペル手稿を用いて出版されたドーム版には見られない。Michel/ Terwiel 2001において復元されたケンペル原稿『今日の日本』にもこの説明は見られる。引用は以下の通りである。

Die Schiffe welche nuhr auf Flüssen oder kleinen See busemen zur lust unter halten werden, sind nach des besitzers fantäsey auf verschiedene Weise gebauet; viele also, das sie uhr mit ruderen können fortgebracht werden. Der raum oder unterste Lage ist gahr niedrig, und uber deßen platten sollor oder überlauff ein hoch erhabenes Verdeck mit schaub Kammeren und offenen fenstern zum plaisir elngerichtet, oben mit vielen flaggen und wimpelen zur pracht behangen; welches alles man den augen beßer mit einem Portrait, als den Ohren mit der beschreibung vorstellen kan. (Michel/ Terwiel 2001, 1/1, p322)

ケンペルの手稿においては「遊覧船」ではなく、単に「川を上下したり、小さな湖や入り江を横切るのに使われる船」として説明されている。英語版1727の説明と大意はかわらない。また末尾に「これらの説明を耳で聞くよりも、その描写を目で見たほうが全ての人にとってよいであろう。」と、示唆しているが、「遊覧船の図」や、「第○図を見よ」といった指示は見られない。したがって、「図21、挿絵5と6を見よ」というのはショイヒツァーによる言で、この図像を付け加えたのも彼によるものだと考えられる。

⁴¹ Dobbs, Arthur: A Letter from Arthur Dobbs Esq; of Castle-Dobbs in Ireland, to the Rev. Mr. Charles Wetstein, Chaplain and Secretary to His Royal Highness the Prince of Wales, concerning the Distances between Asia and America In: “Philosophical Transactions”, Vol. 44, 1747, London, p. 471-476 以下Dobbs1747とあらわす。

⁴² デレク・マサレラ「探究心と知性の人々」(『遙かなる目的地』所収)

⁴³ Extract of a Letter from ARTHUR DOBBS, Esq; to the Rev. Mr WETSTEIN, with Remarks on the preceeding. In “Gentleman's magazine”, vol. 19, London, 1749. 以下Dobbs1749とあらわす。

⁴⁴ Buache, Phillipe: “Considerations Geographiques et Physques sur les Nouvelles Decouvertes au Nord de la Grande Mer, Appelle'e Vulgairement la Mer du Sud”, Paris, 1753. 以下Buache1753。本文および図像に関しては、ゲッチンゲン大学所蔵のものを用いた。Göttinger Digitalisierungszentrum (<http://www.gdz-cms.de/>)を参照。

⁴⁵ Buache1753, p46

⁴⁶ ギョーム・ドリールGuillaume Delisleが1745年に考案した円錐図法の一つ。緯線は同心円、経線は中心点からの放射状の直線で表される。

⁴⁷ Guignes, Joseph de: Recherches sur les navigations des chinois du coté de l'Amérique et sur quelques peuples situés á l'extrémité orientale de l'Asie In: “Mémoires de littérature de l'Académie Royale Inscriptions et Belles-Lettres”, Paris, 1761. 以下 de Guignes1761と表記する。

⁴⁸ de Guignes1761, p515。

⁴⁹ 当時の王立協会Royal Society秘書のThomas Birch (1705-1766)は大英博物館設立直後の常任理事として功績を残した人物としても知られている。A. E. Gunther: The Royal Society and the Foundation of the British Museum, 1753-1781. In “Notes and Records of the Royal Society of London”, vol. 33, no.2, London, 1979. および藤野幸雄『大英博物館』(岩波書店1975)を参照。またスローンは1727～1741年の間、王立協会の会長を務めている。

⁵⁰ グアシュとドリール作成の地図を改訂したもの。蝦夷地の東海上にKia-ytaoが描かれるなど、『万国総界図』の痕跡がみられる。九州大学附属図書館所蔵。なお、九州大学デジタルアーカイブ「アジア図」<http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/asia/>にて閲覧可能。

⁵¹ Klaproth, Heinlich Julius: Notice d'une Mappemonde Japonaise, conservée dans le Musée Britannique a Londres. In: “Mémoires relatifs a l'Asie”, tome 3, Paris, 1828. 以下Klaproth1828と表記する。

⁵² Klaproth1828, p471

⁵³ 東洋学者ウィリアム・フットマンWilliam Huttmanと考えられる。彼には中国の地図に関する論文Huttman, William: On Chinese and European Maps of China. In “The Journal of Royal Geographical Society of London”, London, 1844.がある。

⁵⁴ 以下の引用はN.J.A.1828のp400による。

⁵⁵ 神戸市博物館所蔵貞享5年初版本および九州大学附属図書館所蔵宝永5(1708)年再版本(支子文庫 290/ハ-1/1)を参照。

- ⁵⁶ 当該箇所は「アフリカ北部、西地域の東側にはMarokan、つまり、モロッコ帝国が見られ、またその中には二つの州すなわち南にAkatsisou、北にNatokarouがある。」(Klaproth1828, p478)となっている。
- ⁵⁹ 神戸市博物館所蔵本では大清国は濃黄色、朝鮮は薄赤色、韃靼国は薄黄色、小天竺は白色、日本が赤色となっている。
- ⁵⁸ 英語版1727, p68
- ⁵⁹ デレク・マサレラ「一六〇〇年から一八五八年の英日関係」(『日英交流史 1600-2000』第1巻 政治・外交1、東京大学出版会2000) p23～25を参照。
- ⁶⁰ Dobbs1747およびDobbs1749。差出年月日はFeb. 10. 1746-7. とされている。以下の引用文はDobbs1747より。
- ⁶¹ レオンハルト・オイラーLeonhard Eulerはかの「オイラーの法則」で有名な18世紀最大の数学者であり、当時はペテルスブルグの科学アカデミーに所属していた。彼は『学士院紀要』に寄稿した1746年12月10日付の手紙の中で、ベーリング探検隊の報告書を利用して、レナ川、オビ川など北東アジア地域の緯度や経度を計算によってはじき出している。Euler, Leonhard: Extract of a Letter from Mr. Leonard Euler, Prof. Mathem. And Member of the Imperial Society at Petersburgh, to the Rev. Mr. Cha. Wetstein, Chaplain and Secretary to His Royal Highness the Prince of Wales, concerning the Discoveries of the Russians on the North East Coast of Asia.In: "Philosophical Transactions", Vol. 44, 1747, London, p421を参照。
- ⁶² Dobbs1749(この手紙の抄出)においては、「ケンペル医師によって1689年に日本で購入された地図」とされている。1686年は貞享3年、1689年は元禄2年、また『万国総界図』は貞享5(1688)年の出版であるから、1686年というのはいない。また、1689年にはケンペルは日本に到着していないから、これも不適である。ドブズがどのような資料に基づいて記述したのかは不明である。
- ⁶³ Dobbs1747
- ⁶⁴ フィリップ・ブアシェ(1700～1773)はフランス王室所属の地理学者。1752年に『自然地理学概論』を出版。本書の中では河川や山稜を利用して高低差を含めた、いわば三次元の地図を作成しようと試み、広く評判を得た。本稿で扱う1753年に出版した『俗に南海と言われる大海の北部の新発見に関する地理学および物理学の考察』においてはベーリング探検隊の報告書を元にしてアジア、アメリカを含む北太平洋地域の地理に関する考察を行っている。
- ⁶⁵ ニコラトリゴーNicolas Trigault(ラテン語表記はNicolao Trigautio)はフランス人宣教師。1611年に南京入りし、各地で布教に努めた。著書にマテオ・リッチらの書簡を集めた『キリスト教徒の旅』De Christiana expeditione apud Sinas suscepta ab Societate Jesu ex P. Matthaei Riccii:EX. P. Matthaei Riccii, ejusdem societatis, commentariis, libri v., Nicolas Trigault, Lyon, Horatius Cardon, 1616.などがある。
- ⁶⁶ Buache1753, p47
- ⁶⁷ Buache1753, p47-48
- ⁶⁸ 本稿2章に引用の『日本誌』1巻4章を参照。
- ⁶⁹ 図版については秋月1999のp84および『西洋人の描いた日本地図』(OAG1994) p167を参照。
- ⁷⁰ J.N.ドリール(1688～1768)はフランスの天文・地理学者。1725年ピョートル大帝に招かれペテルブルグに移り、ロシアアカデミー会員として多大なる業績をのこす。
- ⁷¹ ちなみに現代のピンイン表記はHá yǎi dǎo もしくはXiā yí dǎo
- ⁷² 仏語ではTerre de Jean de Gama、英語ではGamas Landと表記される。ガマの陸地については秋月1999、エリ・エス・ベルグ『カムチャツカ発見とベーリング探検』(龍吟社1946。本稿では復刻版原書房1982を用いた)に詳しい。
- ⁷³ Buache1753, p128
- ⁷⁴ J.N.ドリールの図(手書)は秋月1999, p102-3に所収。ドリールが地図に附した説明書によると「ドン・ジュアン・デ・ガマが発見した陸地を余はカムチャツカの真向いに記入したのであるが、この陸地はアメリカ大陸の、恐らくはマルチン・デ・ア

グヴィラルが発見したカリフォルニア北部のある湾の付近に連続しているものと想定される。ドン・ジュアン・デ・ガマの発見した陸地を探索せんとせば、カムチャツカより進発する方が遥かにはやく、また確実であって、僅かに半日の航程である。なぜならガマの陸地はいわゆるカンパニーランド東方にあたっているからである。カンパニーランドは1643年オランダ船隊(筆者注:マールテン・ヘルリッツ・フリースによる航海)によってはじめて発見され、オランダの皇帝の名においてオランダ領に編入された」とある。なお引用はベルグ1982、p205より。下線部は筆者による。固有名詞、仮名表記を一部改めた。

⁷⁵ 平林広人訳『ベーリングの大探検 副司令ワクセルの手記』(石崎書店1955) p117~118より。適宜表記をあらためた。

⁷⁶ ゲオルグ・ウィルヘルム・ステラー「カムチャツカからアメリカへの旅」(加藤九祚訳『世界探検全集』第4巻、河出書房新社1978所収)

⁷⁷ そもそも、地図の作成者であるJ.N.ドリール自身もガマの大地はアメリカ大陸と陸続きになっていると考えていた。

注74参照。

⁷⁸ Buache1753, p127-128

⁷⁹ Buache1753, p129

⁸⁰ 中国で宣教師として活動していたアントワーヌ・ゴービルAntoine Gaubil—彼は当時のヨーロッパにおいて中国の言語および歴史学の権威と見られていた—は1755年11月23日付書簡のなかで「われわれはこの地でドリール、ブアシェ両氏によるロシア人のアメリカ発見地の地図を拝見いたしました。ドギーニュ氏というバリエで中国語を学んだフランス人は、中国の書物のなかに西暦458年の中国人による中国からアメリカのカリフォルニアまでの航海について発見したと信じております。彼は、この航海の地図を印刷させ、また、その地図の上にアカデミーに対する記録や美学についてのいろいろなメモが書いてありました。私は、この航海が作り話にすぎないと信じ、ドギーニュ氏が彼の発見の詳細を書き送ってくれた手紙の1つへの返事の中で、私のこの考えを書いてやりました」と述べている(ゲルハルト・フリードリッヒ・ミュラー『アジアからアメリカへの航海』、引用は北構保男『千島・シベリア探検史』、名著出版1982、p230、一部人名表記を改めている)。ゴービルおよびこの手紙を紹介したミュラーはこの西暦458年に行われたという中国人の航海記録について信用できないものと考えているが、当時ヨーロッパにおいてドギーニュ説がどの程度受け入れられたのかについては後考を期したい。

⁸¹ Buache1753, p128

⁸² 仏語版1729, p59

⁸³ なお、『今日の日本』にもこの文章は存在する。Michel/Terwiel 2001, 1/1, p55を参照。

⁸⁴ 写真版の複製本がBibliotheca Australianaの第26巻としてVoyages from Asia to America. Amsterdam, 1967.の名で出版されている。

⁸⁵ なお、1766年には仏語版“Voyages et Decouvertes.” Amsterdam, 1766.が出版されている。

⁸⁶ 北構訳p185

⁸⁷ Kia-y-taoを英語式の発音にあわせた綴りに変化させたものか?

⁸⁸ 北構訳p74

⁸⁹ Recueil de planches, sur les sciences, les arts libéraux, et les arts mécaniques, avec leur explications. Tome1-11, Paris, 1762-72.なお、ジャック・プルースト『フランス百科全書絵引』(平凡社1985) p341にブアシェの論文から引用した図版がある。

⁹⁰ クラブプロートに関しては石田幹之助『欧米・ロシア・日本における中国研究』(科学書院1997)、ドベルグ美耶子「仏訳『三國通覧図説』をめぐる諸問題—クラブプロートの用いた原書を中心として—」(『日本洋学史の研究Ⅹ』創元社1989)、仲井間憲児他「クラブプロート『アジアの文献・歴史・言語のための論集』の検討」(『琉球大学欧米文化論集』40号、1995)、高田時雄「クラブプロート」(『東洋学の系譜 欧米編』大修館書店1996)、P・F・Kornicki:Julius Klaproth and His Works. In: “Monumenta Nipponica”, Vol. 55, No. 4., 2000., Walravens, Hartmut:Julius

Klaproth (1783-1835) : Briefe und Dokumente (Orientalistik Bibliographien und Dokumentationen ; Bd. 4), Harrassowitz, 1999. Walravens, Hartmut: Julius Klaproth (1783-1835) : Leben und Werk (Orientalistik Bibliographien und Dokumentationen ; Bd. 3)を参照した。

⁹¹ Abraham Ortelius “THEATRVM ORBIS TERRARVM” (1570初版。なお臨川書店1991復刻版)を参照。
『オルテリウスの地図帳』と記したときは本書を用いている。

⁹² Michel/Terwiel 2001, 1/2, p225を参照。オランダの当て字に「阿蘭陀」が用いられるように、日本語では「阿蘭」は「オラン」と発音する。クラブロートは中国語読みでアランAlanと表記している。

⁹³ 『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』(岩波書店1944)所収。

⁹⁴ Frislandについては海野2003を参照。

⁹⁵ 読み下しは「この北の国、略(およ)そ二月より八月に至るまで晝(昼)。八月より二月に至るまで夜。」になる。

⁹⁶ 読み下しは「是より南方の地、人到着者少き故、未だ審らかならず。其の人物如何(いかん)。」なお、『坤輿万国全図』に全く同文のものがこの西隣の半島の中に記されている。

⁹⁷ 「大清」のピンイン表記。

⁹⁸ 「北」のピンイン表記。

⁹⁹ 「南」のピンイン表記。

¹⁰⁰ 「朝鮮」のピンイン表記。

¹⁰¹ フォルモーサFormosaすなわち台湾のこと。

¹⁰² 現、新疆ウイグル自治区の和闐のこと。

¹⁰³ 「西」は「東」の間違いである。地図上ではMantenkaはKineyaやBokoreの東部に位置されている。

¹⁰⁴ Merendeをさす。

¹⁰⁵ KorouranteaとNouvelle Franceをさす。

〔付記〕

本稿の作成にあたって、在外文献および古地図に関して九州大学総合研究博物館の宮崎克則助教授から、またケンペル関係および訳出に関して九州大学言語文化研究院のヴォルフガング・ミヒエル教授から数々のご教示を賜った。記して両氏のご学恩に謝する次第である。訳出に関してはなるべく原文に忠実であるつもりだが、もし誤訳あるいは文意の通じない点があるとすれば、すべて筆者の責に帰するものである。